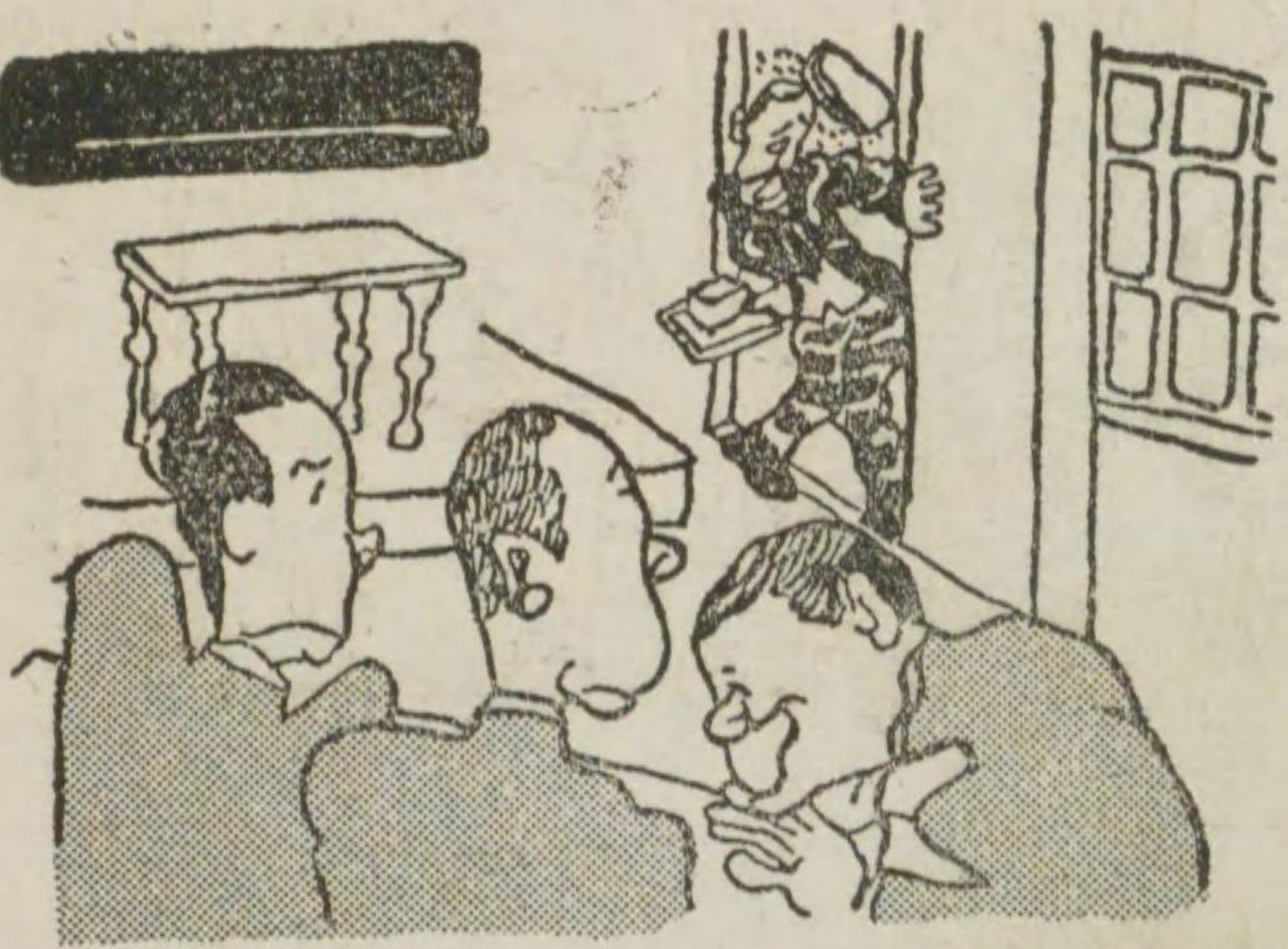




學生生活スケッチ

一 いたづら (其一)



二 いたづら (其二)

級長の背中へ「私ハオベツカ者デス、ソレデ級長ニナリマシタ」と貼紙して悦ぶ奴は、いつも、復習つて來ませんくを、大威張りの聲で張り上げる奴。



三 肥り過ぎる

煮て食ふべく、寄宿舎の裏畑で大根を掘んで、上衣の下へ隠し込み歸りかける。路で畑主の田吾作に逢ふ。田吾作と見こう見し乍ら『どうも寄宿舎の書生つべいにしては、肥り過ぎてゐるから怪しい。』



一平の場



四 仲わる

復習つて來ぬ甲吉に、番が當つたので立つたが勿論出來ぬ。そこで隣の乙吉に教へろくと小聲で云へど、教へて呉れぬ。甲吉怒つて、なぐる眞似をする。乙吉べつかんこの眞似をする。教師曰く、『妙な眞似をしないで早くおやりなさい。』



一平の場

五 背に腹は

試験前になると、普段業勉強くと苛めて居た神經衰弱君の元へ、豪傑連手を合さん許りにして『君濟まんが、どうかノートを、二三日借して呉れんか。』

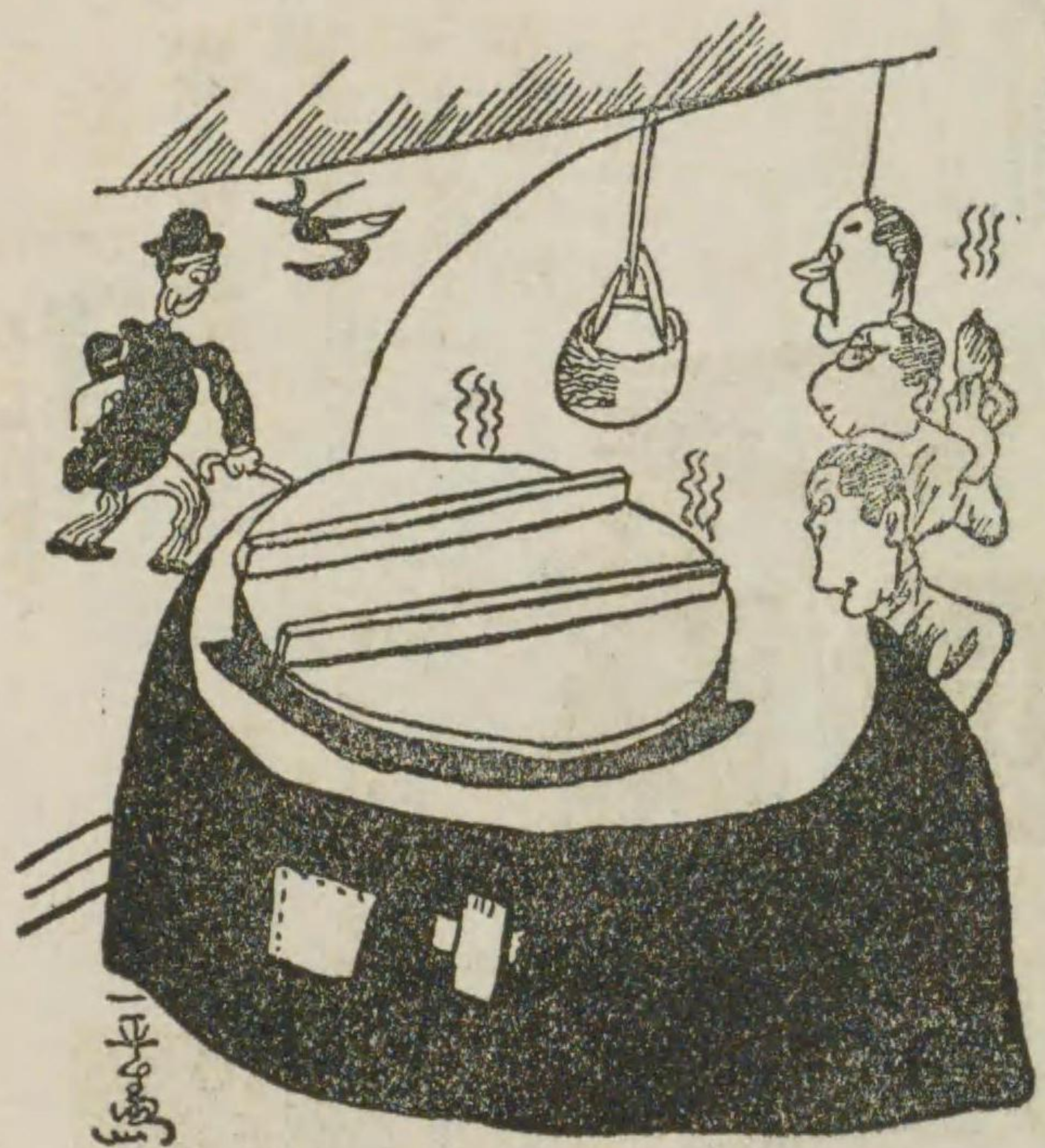
六 あみだの使ひ

舎監が見廻りに歩く
 途中、婢を乗越す
 曲ものを見つけ、
 引つぱると、曲
 者は逃れ、持
 つてた風呂敷
 包みから、何
 やらバラバラ
 とこぼれた。
 舎監燈で照ら
 し見れば芋。舎
 監つまらな相に曰く
 『なんだ、又あみだの使
 か』



七 芋屋は別荘

学校の近所の芋屋を別荘と稱し、放課時には大勢
 しけ込む。教師が通ると暫く籠の中へ蒙塵して、やが
 て時刻を見計らひ、揃つて煙つた顔をぬつと出す。



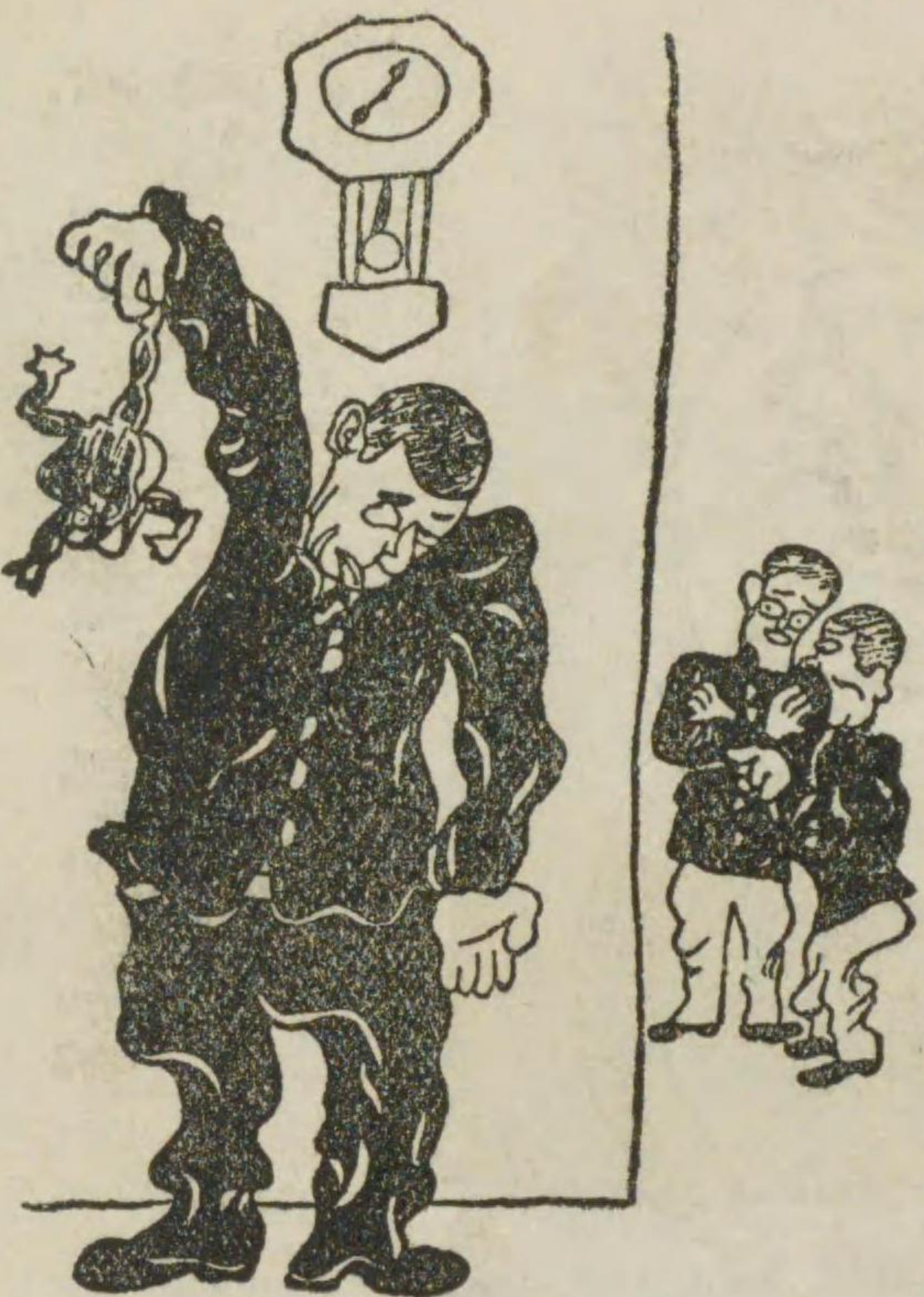
八 電信柱が細い

内密で煙草を吸ひ居る處へ、教師に通られ急いで電信
 柱の蔭へ隠れた學生、曰く『遞信省は何故もつと電信柱
 を太くしとかないのだらう。』



九 蛙と並んで

蛙ぎらひの教師の机の曳き出しへ、蛙を入れた罰として、
教務室の前へ連れて行かれ「蛙と二人並んで、一時間立つ
て、おいでなさい。」



十 運動も度を過ぎては
如何なる場合にも運動を忘れてはならぬとあつ
て、下宿屋の格子をたゞき付けて、靴をぬぐが早
いか、オ一二三で階子の曲昇り、ツルリ足踏み外
して、危うく陥落するところ、オットット、ハ、



十一 果物つき書齋

柿が一杯實つた。その樹へ板で棚を作り、刃物
と本を携へて登り、本を讀んでは、手を延ばして
柿をちぎつて喰ふ果もの付き書齋だと自慢して
居る。但客はよせつけぬ。



學生生活スケッチ

十二 買ひ立ての腕時計

腕時計を買ひ立ての奴、大時計でチャンと二時を
打つと判つて居るのに、女學生と摺れ違ひさま「時
に今、何時か知らんテ」と、腕を振り廻す。





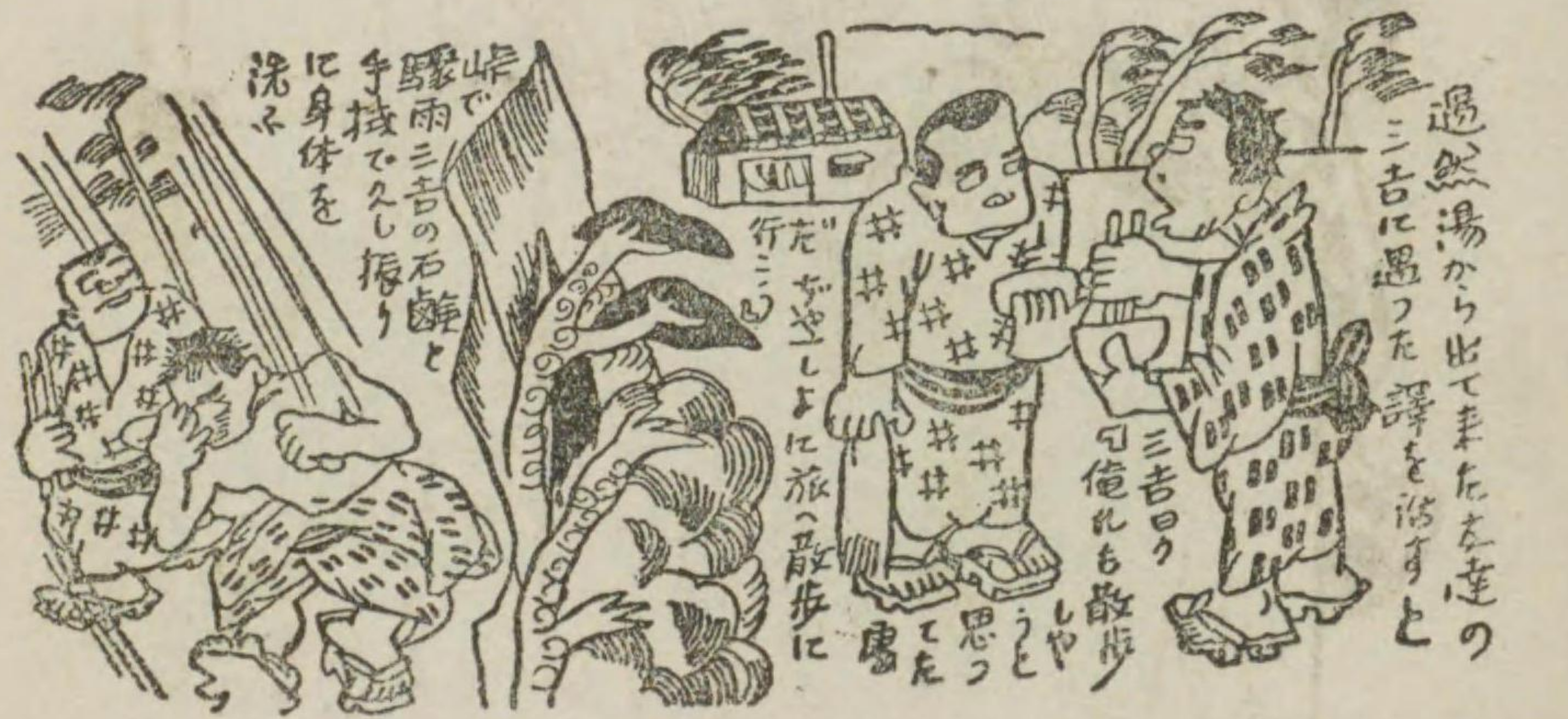
十三ピヤホール

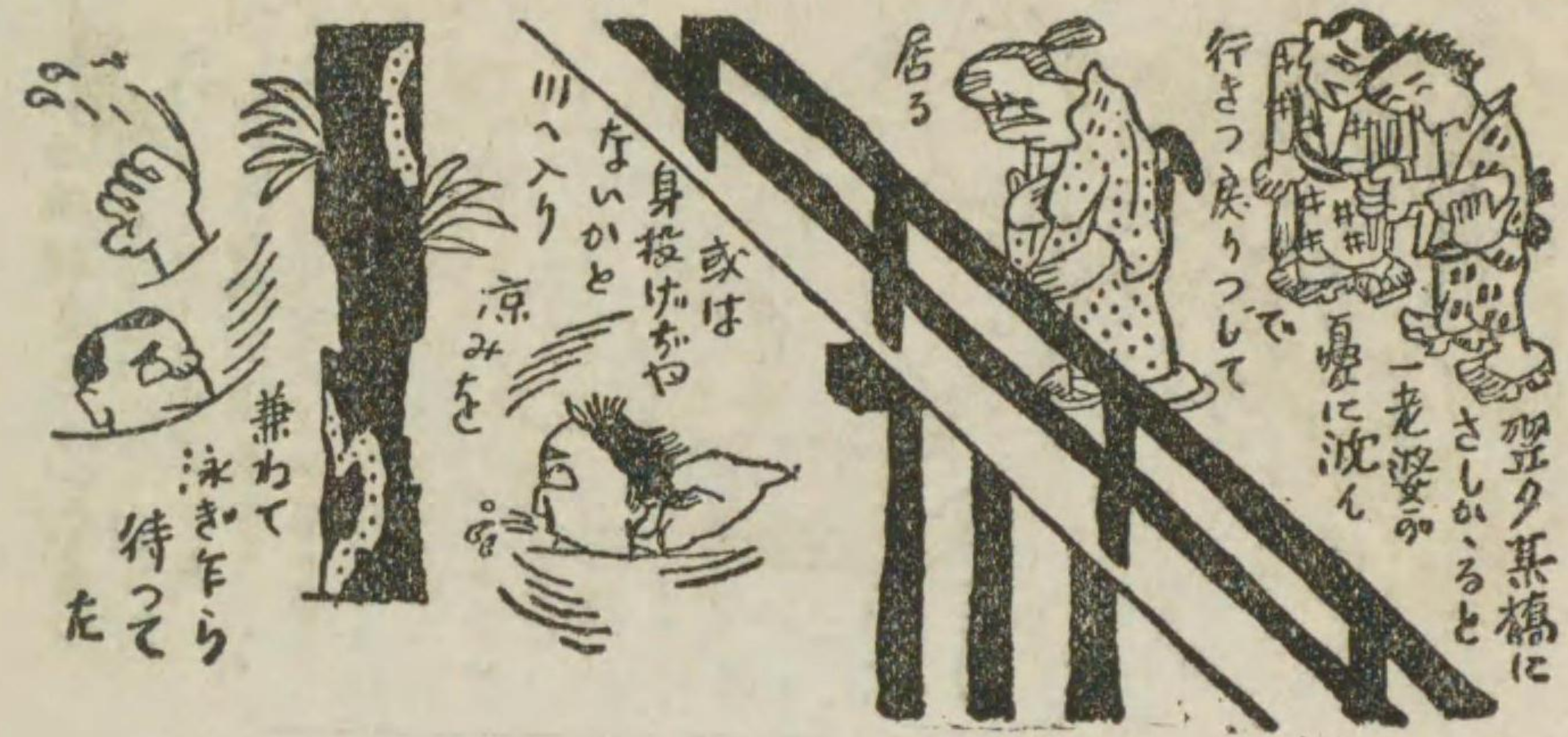
ピヤホールで金を拂ひ、
釣銭が来たのを、少し多過
ぎるナアと思ひ乍らも、我
慢してみんな残し、給仕女
に禮を言つて貰ひたさに、
顧りく出て行く大屋
生。

漫画旅行

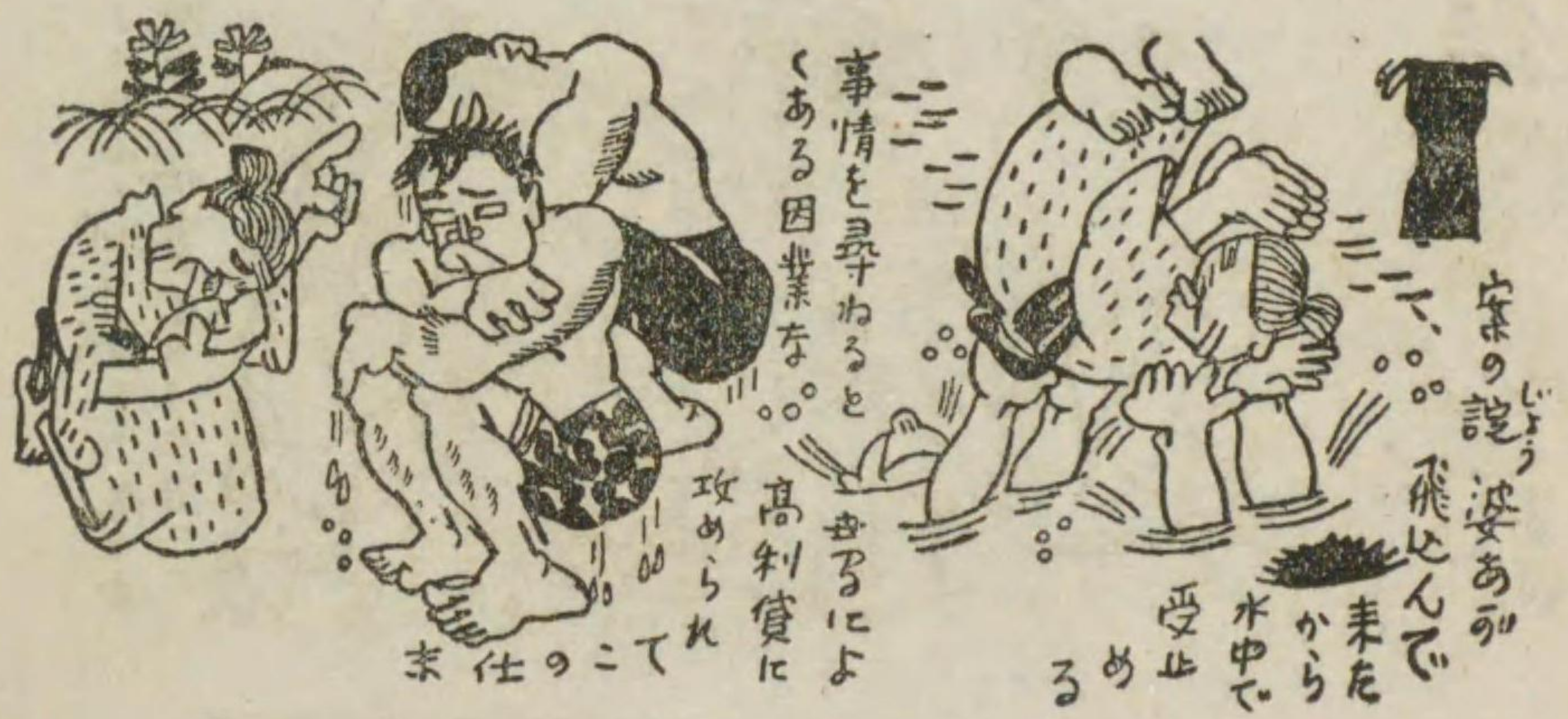


漫畫旅行





夏夕某橋に
さしあると
一老婆が
夏に沈ん
行さつ戻りついで
居る
或は
身投げをや
ないかと
川へ入り
涼みを
兼わて
泳ぎ下り
待つて
た



床の説、波あり
飛んで
来た
から
水で
受止
るめ
母によ
高利貸に
攻められ
事情を尋ねると
ある因由なる



免も用も汲女の
家へ行くと
居ると
頼て
高利
は日僱運飯を
いてやるは
掛合つ
証文を差か
した。高利貸
の家では夕を毎日暮かした可



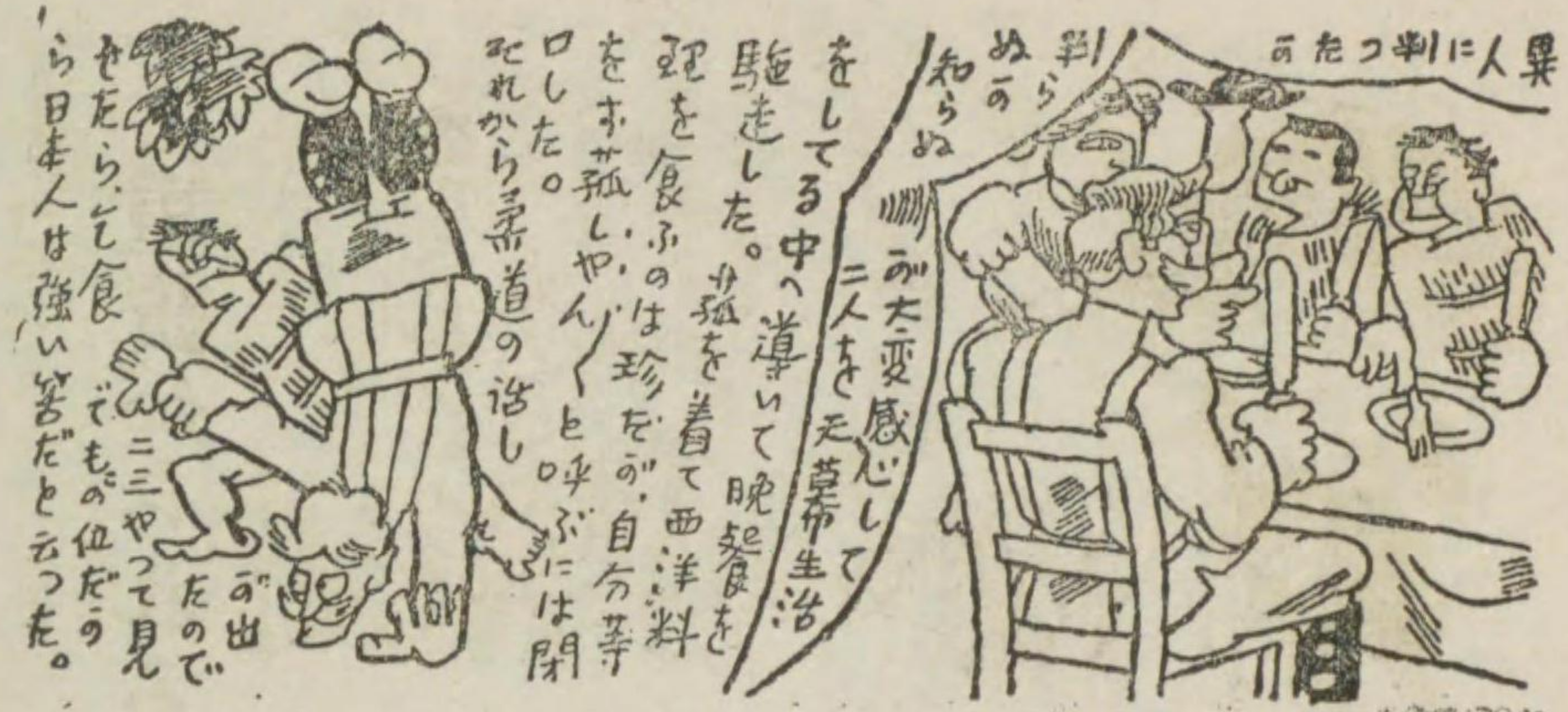
勿論絶食して二人だか
ら杆一と上げにも二人い
うて然もいふうする
見兼ねて
高利貸の
やが握飯
を差出した
けられた
奴の飯を
で誰か喰
かむ
流石のや
かも仕舞には
感心して
口心を入れ換へま
す。これは正しい
人の飯です
さし置
なくお納めなすつて



その深山の洞で暮らさるる食と金
宿した。僻處に居るも生涯に
普通の
人を見る
こい
ふ
客易
聖朝出立の際着
物を取換へてやる。



要人に別れて ある町の中学校
の運動場の
と野球
外れ
て来た
を丸を
取り扱投返す時
一寸お球を
投げてやる
目を丸く
した。



重寶がられる學生

(一)
寫眞好きの學生によつて、
木の下に立たせられ、詩
人でもないのに、詩集や花
を持たせられ、寫眞のモデ
ルにされる。



重寶がられる學生



(二)
『オイ投げの呼吸を覺
えたいんだから、一寸
身體を貸して呉れ』と
柔道の稽古臺にされる。



三八九

(三)
野球のネットの
代りに、
捕手のうしろに
番をして、
球拾ひをさせらる。

(四)

「おい、君濟まないが、あの糞をどけといて呉れんか、出入りに邪魔だ」と寄宿舎の入口にしてある、犬の糞を除けさせられる。



(六)

その代り校中で、誰いふとなく、おやぢの國ちゃん頼母しがられ、運動部の委員長に選舉されぬ事は無い。



(五)

別にボートに、熱心でもないのに、彌次軍の大旗を持たせられ、堤上に目印に立つてる。



学生生活



学生生活

ボア餅を焼いてるナニ番室か或は三番か



下で嗅ぎ廻つてる奴禁制の餅を焼いてると突然舎監が入つて来たので周章で、二人は餅を背中へ

一人は懐か入れ熱がつてる

指許り嘗めて居るから一向はねぬ



話の終るか終らぬに一面の札の上を押さへて仕舞ふ足からを



二月





これ評判になつて仕舞には
場の上から鉄拳を見せるた
りで弱虫共は
逃げ出す
様になつた。

学生
の癖に
洋食
やなど
ハ入り
む奴に
一本



競争をして
る時折悪
く偏利な
教師の通り
穴をき出した
腕をやつ
と許りに
掴ま
れ

ある日
三人
集つ
て食
堂の
目
鉄拳



鉄拳制裁
必要はある
原因を言はれ
結局校紀振興の
為め名譽の負
傷の三本
出来て鉄拳団は遂
に解散

校長から
校紀振
興は大に
結構
を
加へる
目
ま

三月

勉強法十二種



ノート
ワックを
積んだ
傍へ
尺度
を立て
もう七
分お
重復習し
て仕舞つた
感るを
楽しみに
勉強する
学生
重箱の柿の本を登らねば
先取で勉強出来ぬ
学生



カードをポケットにいはい
貯へ
歩るき乍ら
自問
自答する
学生



友達を引つ張つてまぬと
勉強出来ぬ学生
君もう二頁
復習す
いん
たから
居てを
殆ど
と辨んぐる



どうしても興えられぬ
榮子は校長へ書
き香むと興え
えられると主張する学生
外出っえお起らぬ
机と目
分とを
縛りつ
けて
勉強
強し
てる
男子生



何か喰い下らすると
勉強にはか
り行くと
生
大に静養して
然る後だと云つて
書い候ばかりし
てる
学生

四月



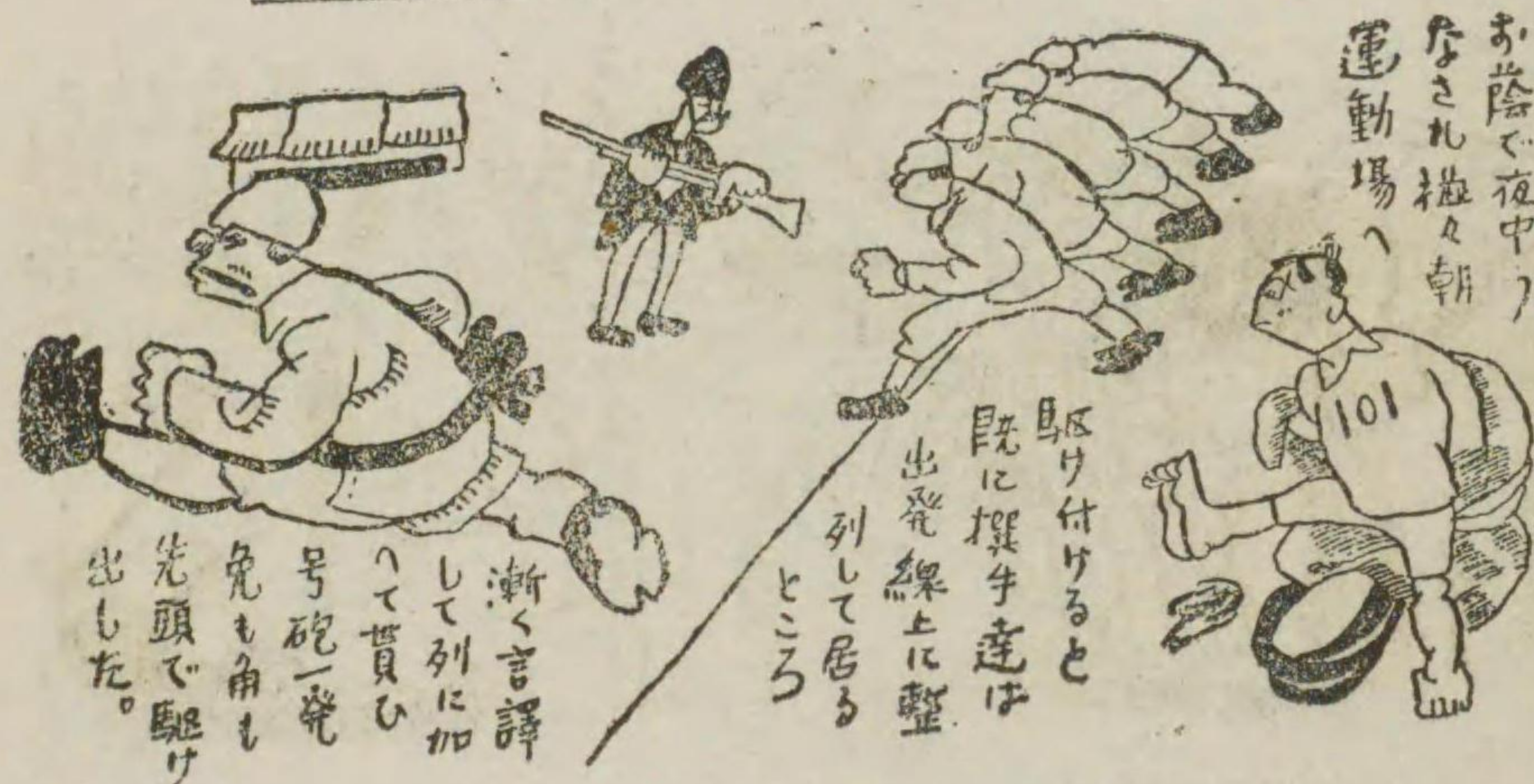
學生生活

長距離競走
彼は長距離競争に参加する
一週も
も前
から水
抜き油
抜きを
やつて
痛養
おひく
ない。
するとの前
夜国もとの伯父
六京して訪ねて来牛めしを馳走し
やうといふ。
喰ふ
で鱈腹



偉人傑士の額
を掲げ
刺刺を
受けぬ
勉強
出来ぬ
学生

時
無時
せぬ
讀書が
出来ぬ
学生



お蔭で夜中
なこれ程々朝
運動場へ

駆け付けると
既に撰牛達は
出発線上に整
列して居る
ところ
漸く言譯
して列に加
へて貰ひ
号砲一発
免も角も
先頭で駆け
出した。



勉強時を
表に作てキキ
と對當てねは
安心出来ぬ
学生



日中は一日
遊んで四日
なり
めと
勉強
出来ぬ
学生



三九七

菓子やあり去年
からの借がある上
主人がキキ目
光らして居る様
捉まてはならぬ
と市道へ廻り
三三
遅れる
此行
と下
免
取り付き
ロマンはこの
人の所を訪
ねるが力
とヨウくら讀んで来らつせ

三九六

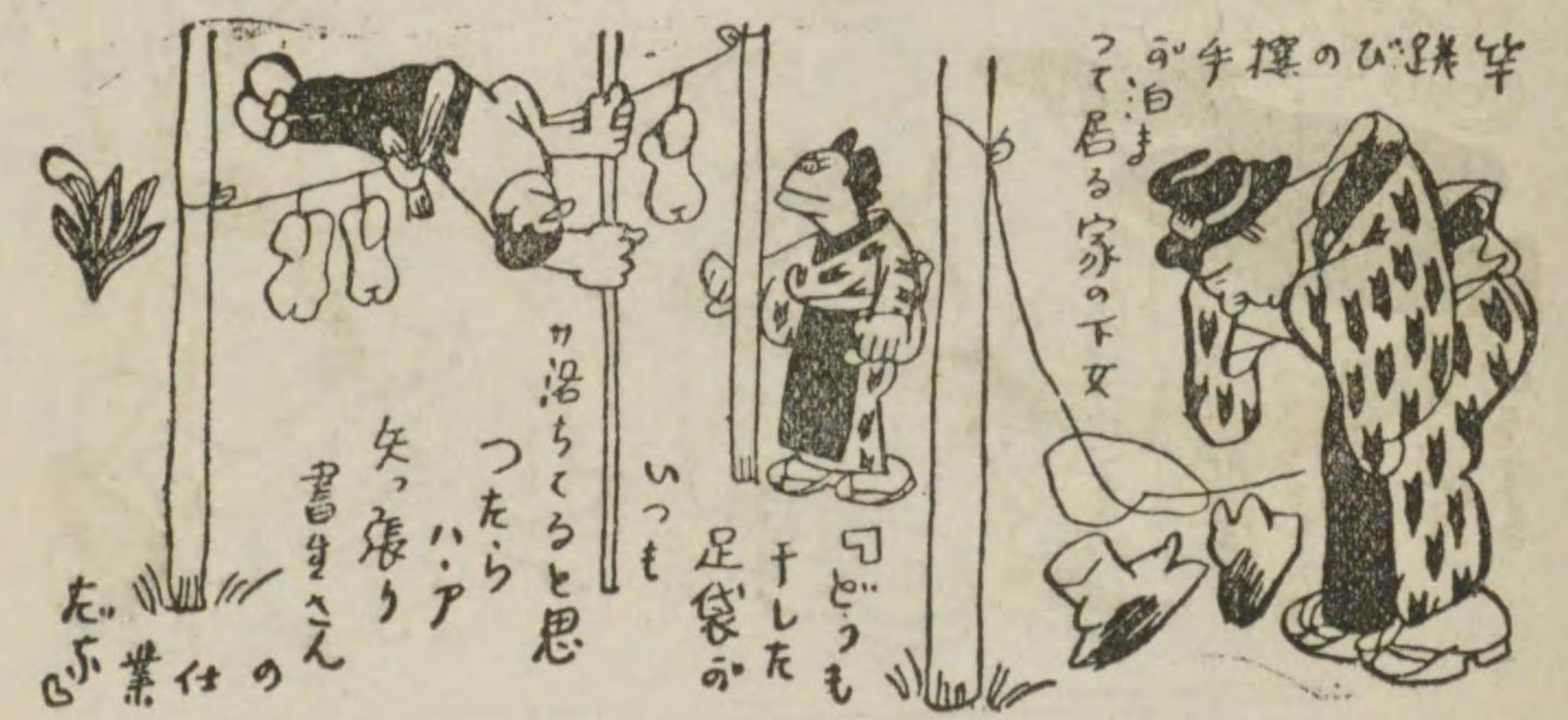


五月

大リンピック豫習

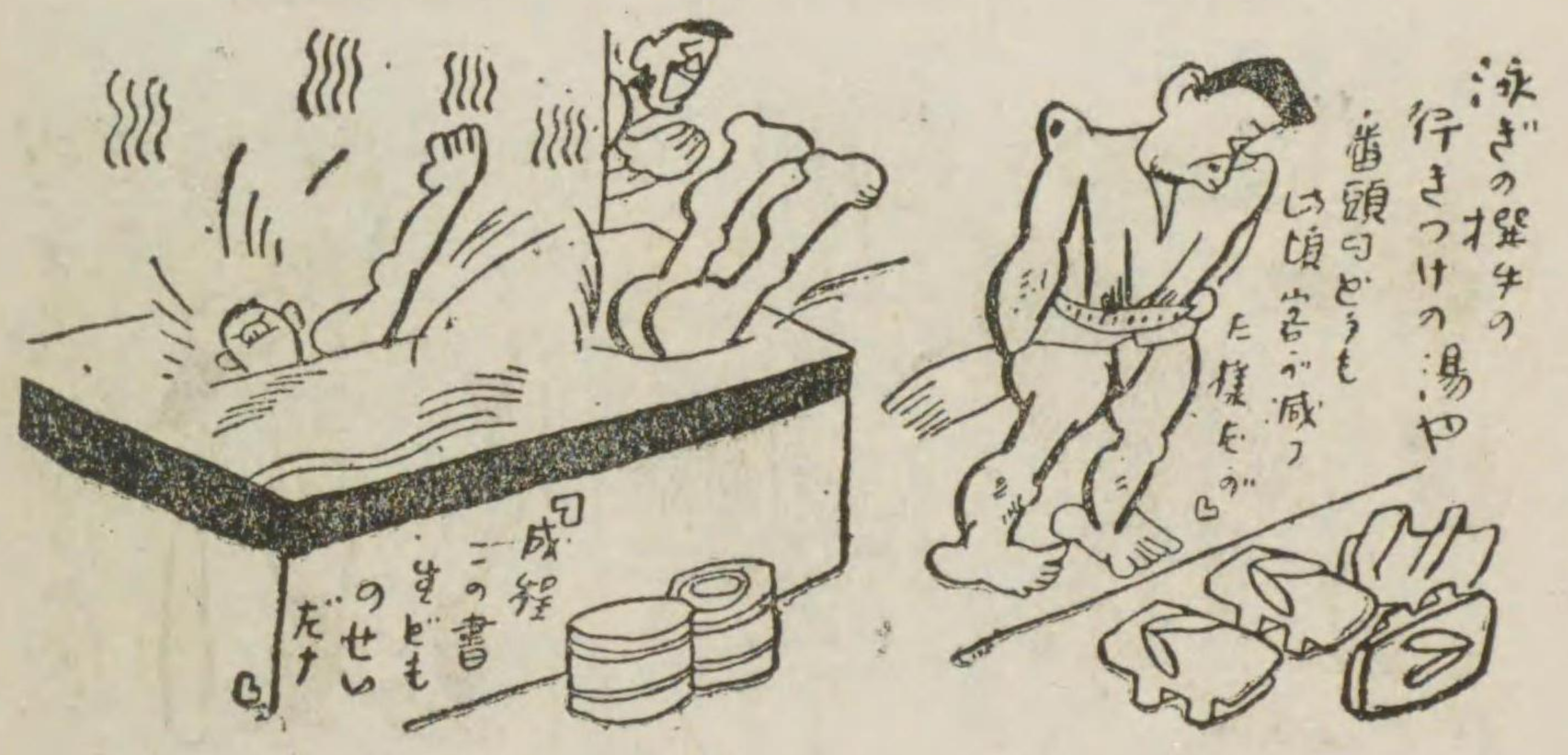


學生生活

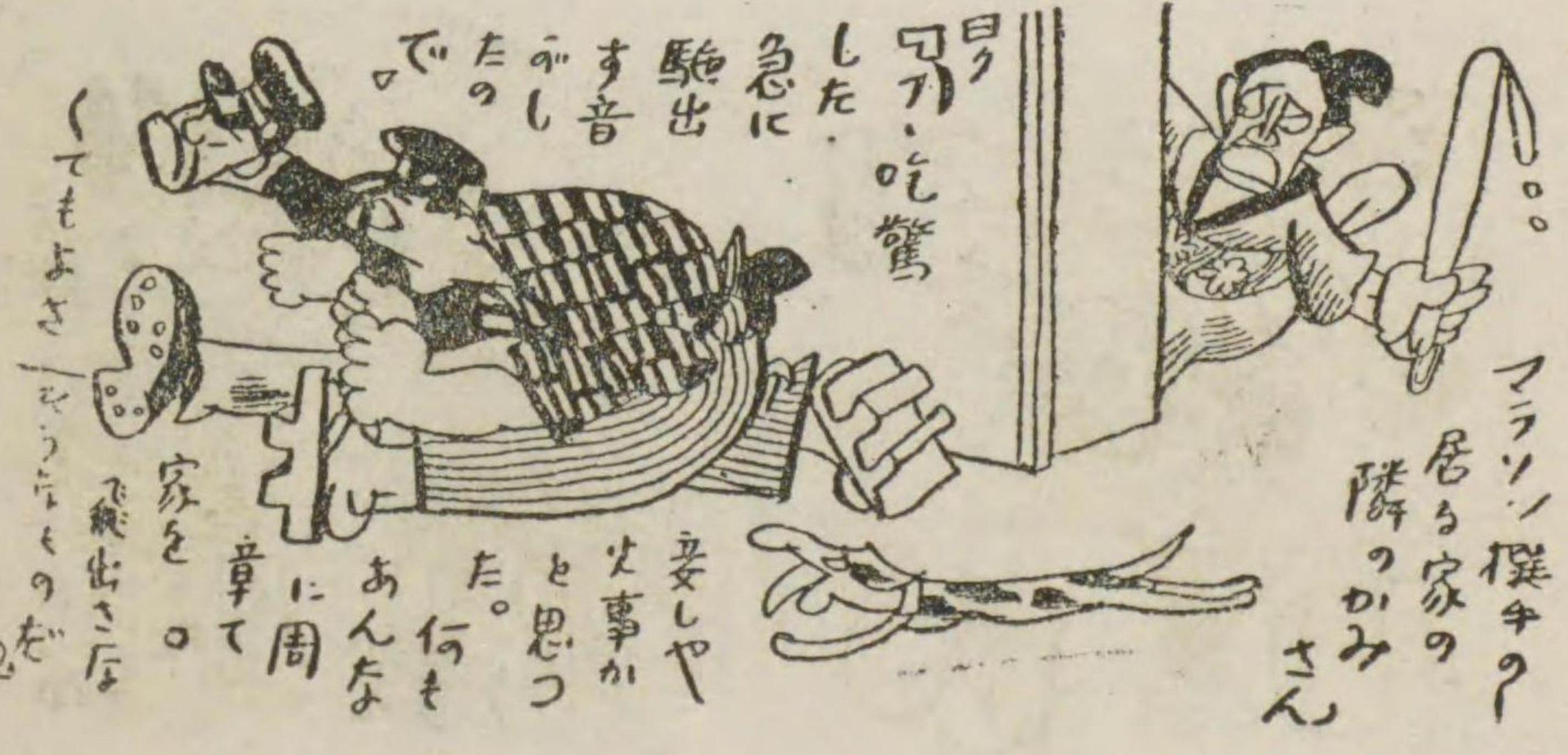




句この頃は
大方受取り
方の要領が
いそいで
野球選手台
宿所の下女
ココレケ
一ふに抛つて
はなんねえ
てば



泳ぎの聲の
行きつけの湯や
番頭どうも
い頃さか威つ
た様を
成程
この書
のせも
たす

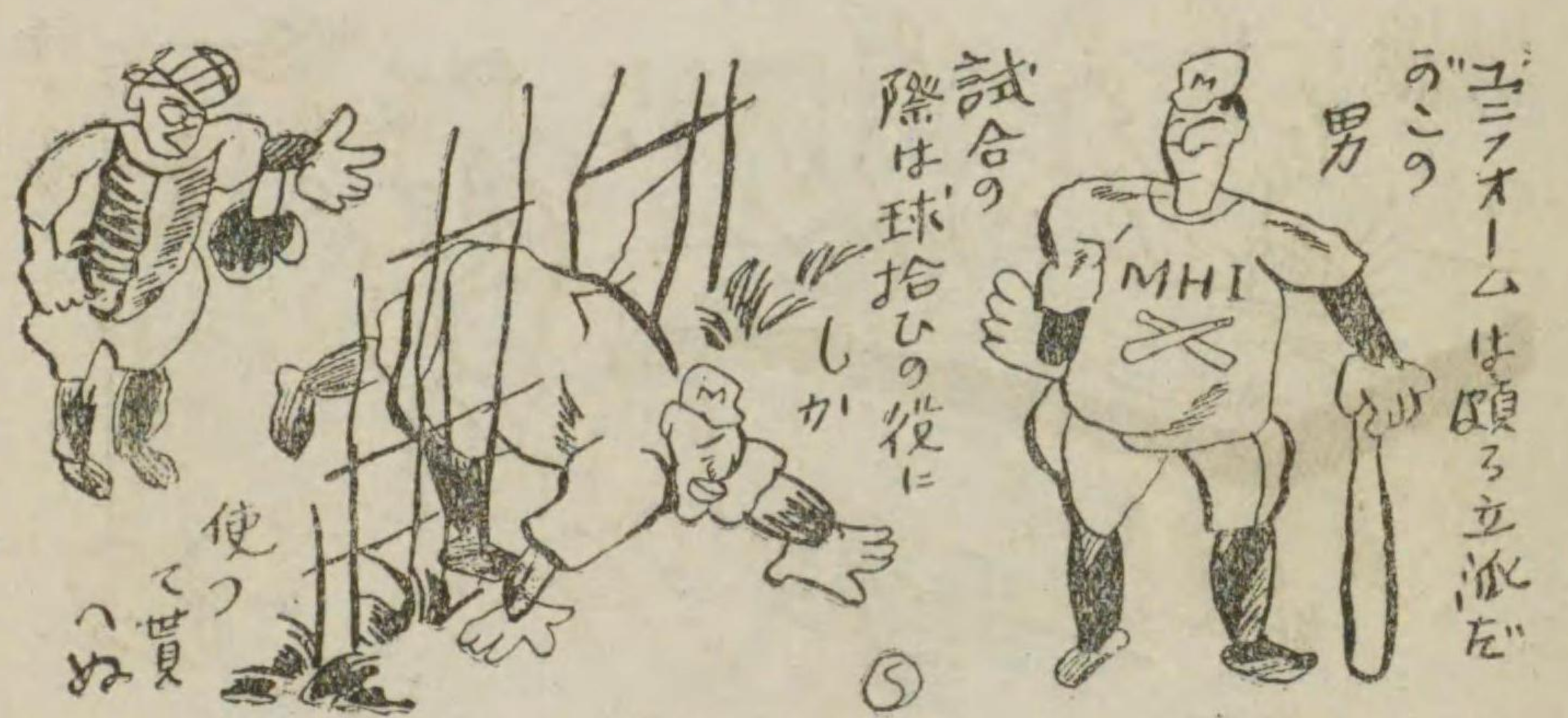


フライングの
居る家の
隣のカミ
さん
変なや
仕事か
と思つ
た。何
もあな
なに周
章で
家を
飛出さ
せてもよ
うなものを

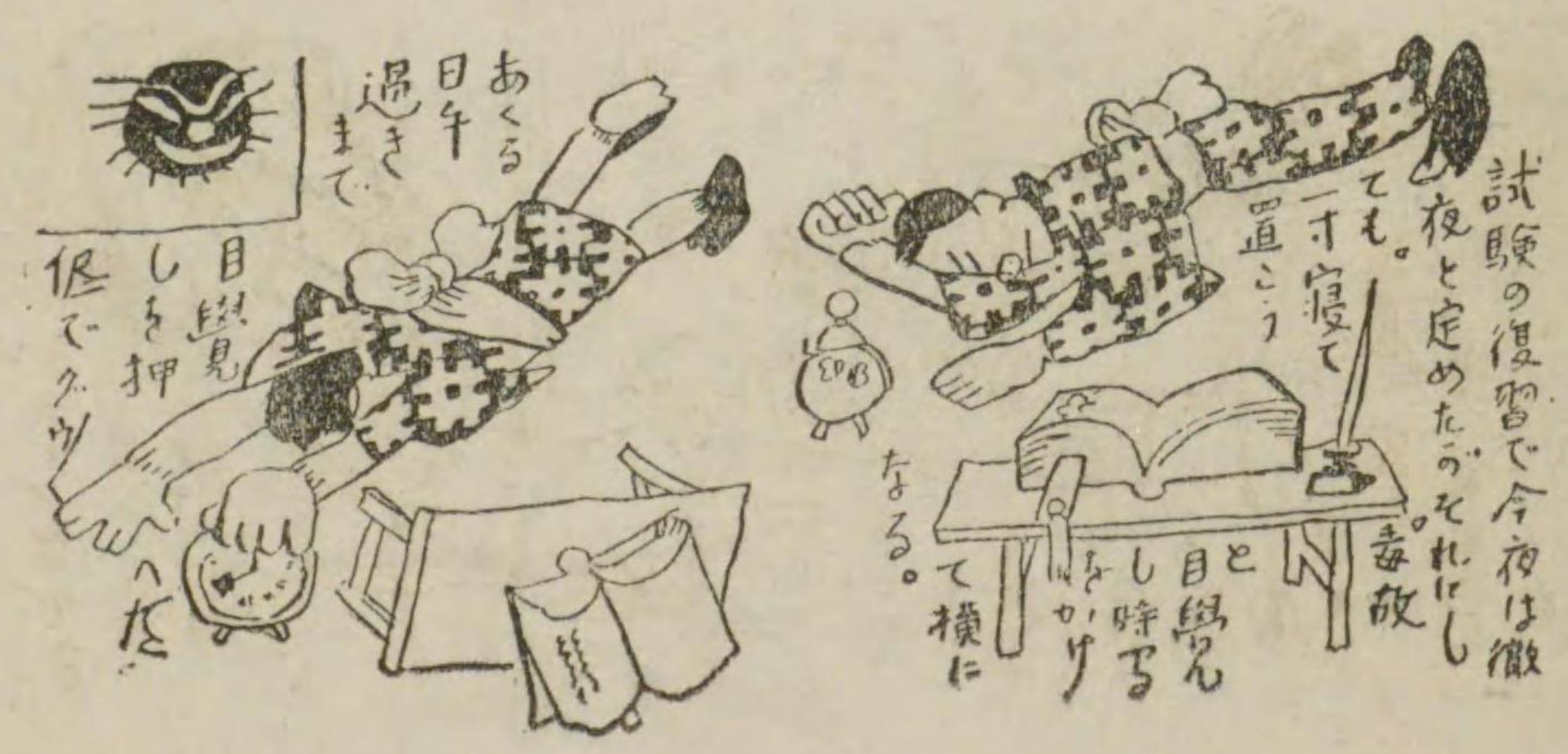
六月



学生百馬鹿
教務時等に教師の眼を
ぬすんで
似顔画
を描く事
は上
守り
圖画の宜生になると
教師の
この画は
一件従に
見るんで
すか横
がす



男子
ユニフォームは頗る立派だ
この
試合の
際は球拾ひの役に
しか
使つ
て貰
へぬ



試験の復習で今夜は徹
夜と定めたがそれし
ても
一寸寝て
直こう
目見
し時
り
て横に
なる
あくる
日午
過ぎ
目見
しを
押
込
た



雨中山田
原の町へ
出て破れ
天幕を
古道具屋
漸く賣つ
宿屋へ
午後貸浴衣の
そろいで海邊
散步
君王侯
宰相の
生活
だ
ね
エ
ン
エ



近所の農家より盆を借りて
末
に物荷に載せて
向岸へ泳ぎつ
き盆は又浮い
て持主の農家
へ送還した
夕方飯を
炊いて
も食の
前のお米は福神漬の上へ俺のは
これだぞと鯛の頭を振り廻した

八月

無銭旅行日記
八月一日 無銭旅行を思ひ立つ
いろいろと度をする



中で一番面
倒な
寝具
と天幕だ、一葉
を穿し防水
布の両者兼
帯の袋を
総つた



夜になつた
用意の防水布の袋の中へ
入つて
寝る
濡る
も受け
か蚊に
も喰は
れず
毛布の下
に横臥する
快ふべか
らず
夜中に枕元で
コソコソ音がする
先程の食奴
大事の荷物を
出してみ
のた



八月四日 出発
路傍の
子供
大河の邊りに来た
渡船はあるが渡し料を
出すその
事がない
旅行の
趣意
に
違ふ
生盛藥
館の藥賣りと
間違つて
来て背
問違つて
て来て背
問違つて
て来て背



八月五日
馬鹿に
調子か
袋競走をする
調子で跳ねて追
かける道は街道
筋に平旦を
逃に極へて
免してやる代りに
次の驛まで荷物を
忘るる食に負はせ

Y君の話

水底の錨を縛りつけて
兄貴と
もぐり
競べを
して身体
浮かぬ様



溺死して
仕舞った。
そして
お鮎さま
せられた。

十月

我慢競べ。寄宿舎中
での虫的漢TとDと
トランプや教留多は弱者
の遊戯だとして



喰いくら

新に我慢
競べと

いふのを
発明し

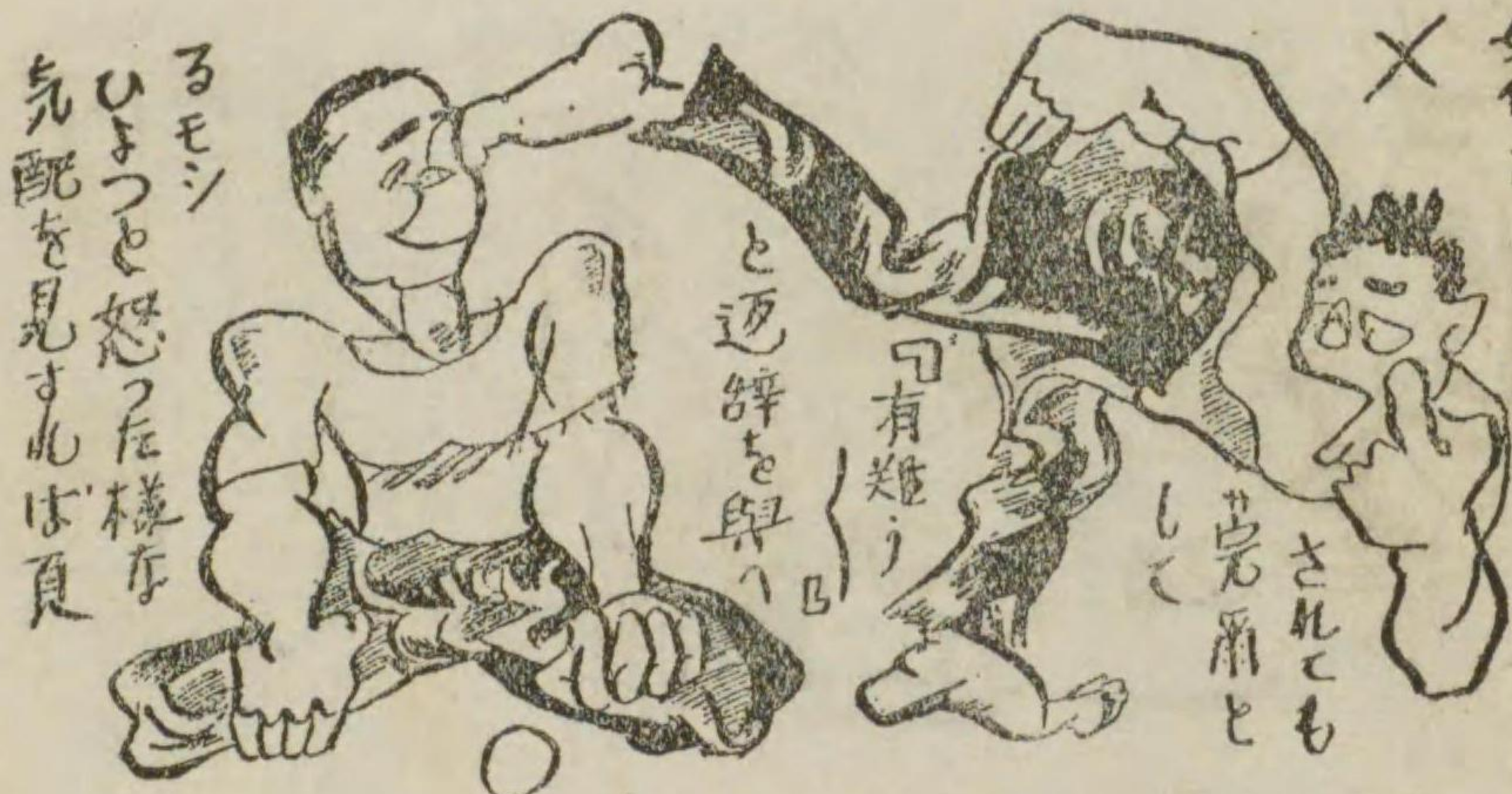
(その一)

逆に

釣らん

て紐煮の

如何なる方法によつて侮辱



るモシ
いよつと怒つた様存
先配を見すれば負

と逆辞を與へ

有難う

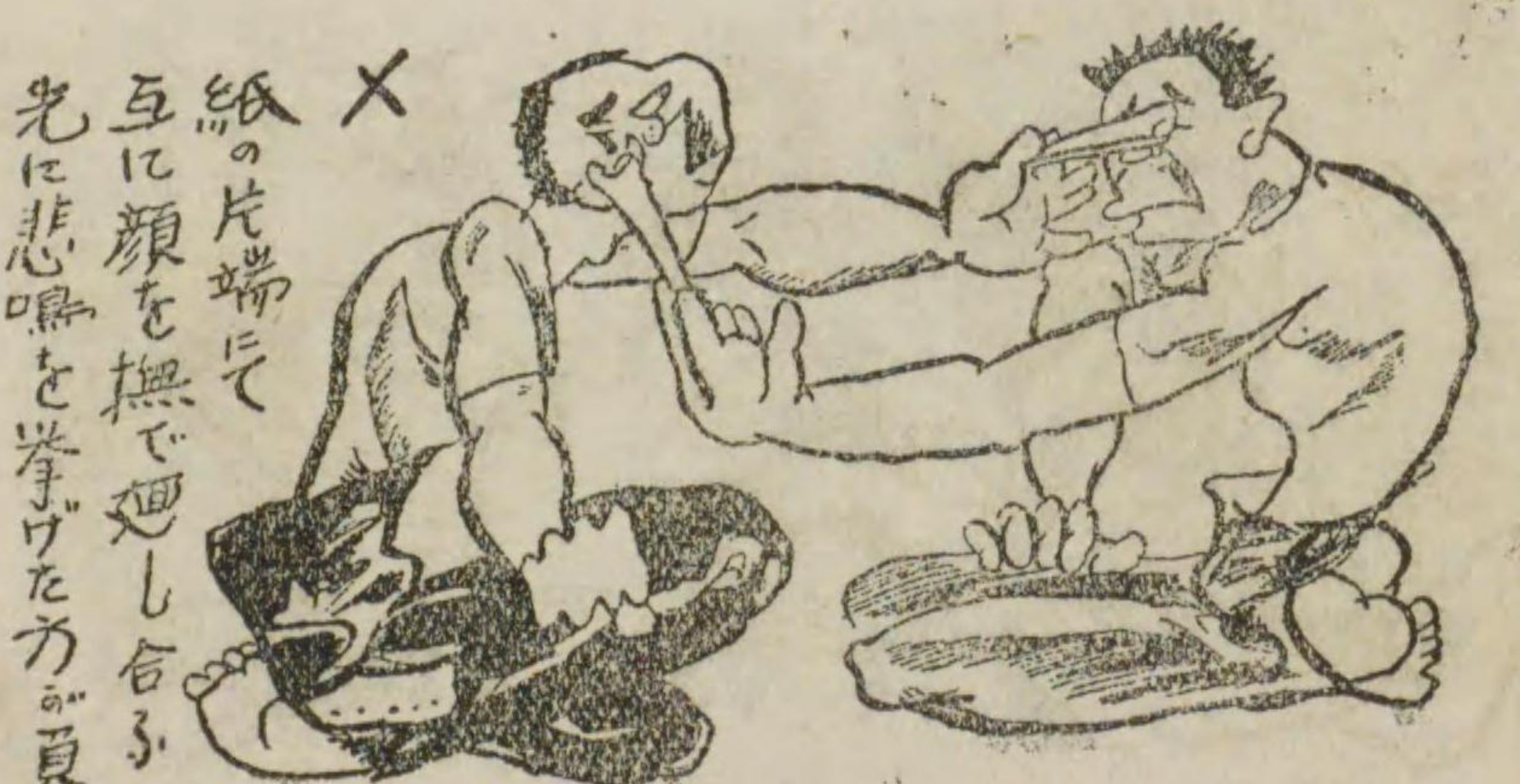
されども
お尻痛と
して

互ひ違ひに頭を
入此違へ
て仰臥



双方より
足を
挙げ組み引いて
覆し合ふ負けを
奴は起き上らせ
られ草になる

くすぐり競べ



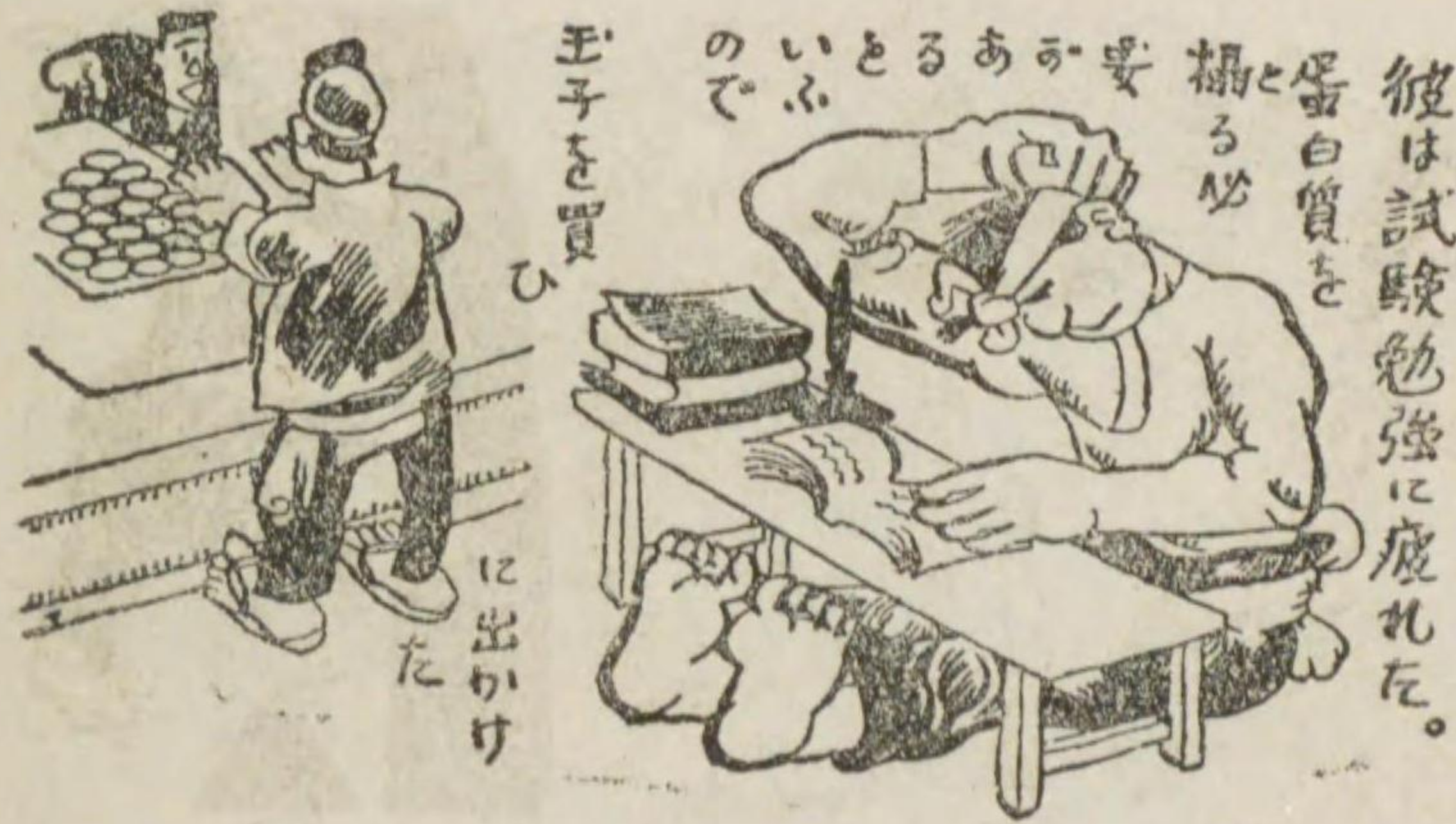
紙の片端にて
互に顔を撫で廻し合ふ
先に悲鳴を挙げた方が負



X

十一月

鶏卵物語





握りつぶして
仕事はふか
とも
思つ
たが
可愛
そ
秋になつた。歯
から及第の
ハカキ
の来た
彼は緑へ出
てかの
彼が大きく
なり
たとき
を作るの
を見て思は
笑した



道徳家
兼
詩人
として
の彼
国許
から餅と手
組衣の下駄を
送つて
来た
包を
開く
と
朽葉
がニ散
る。親の暖い
心と思郷の念と。彼は
甘涙して鮮美をしてる

十二月



彼の六方面
歳晩
に際して
方々の
部屋か
高屋か
新古
げ
理財家と
しての彼
食の賣
つた金で
忘年會
を開く



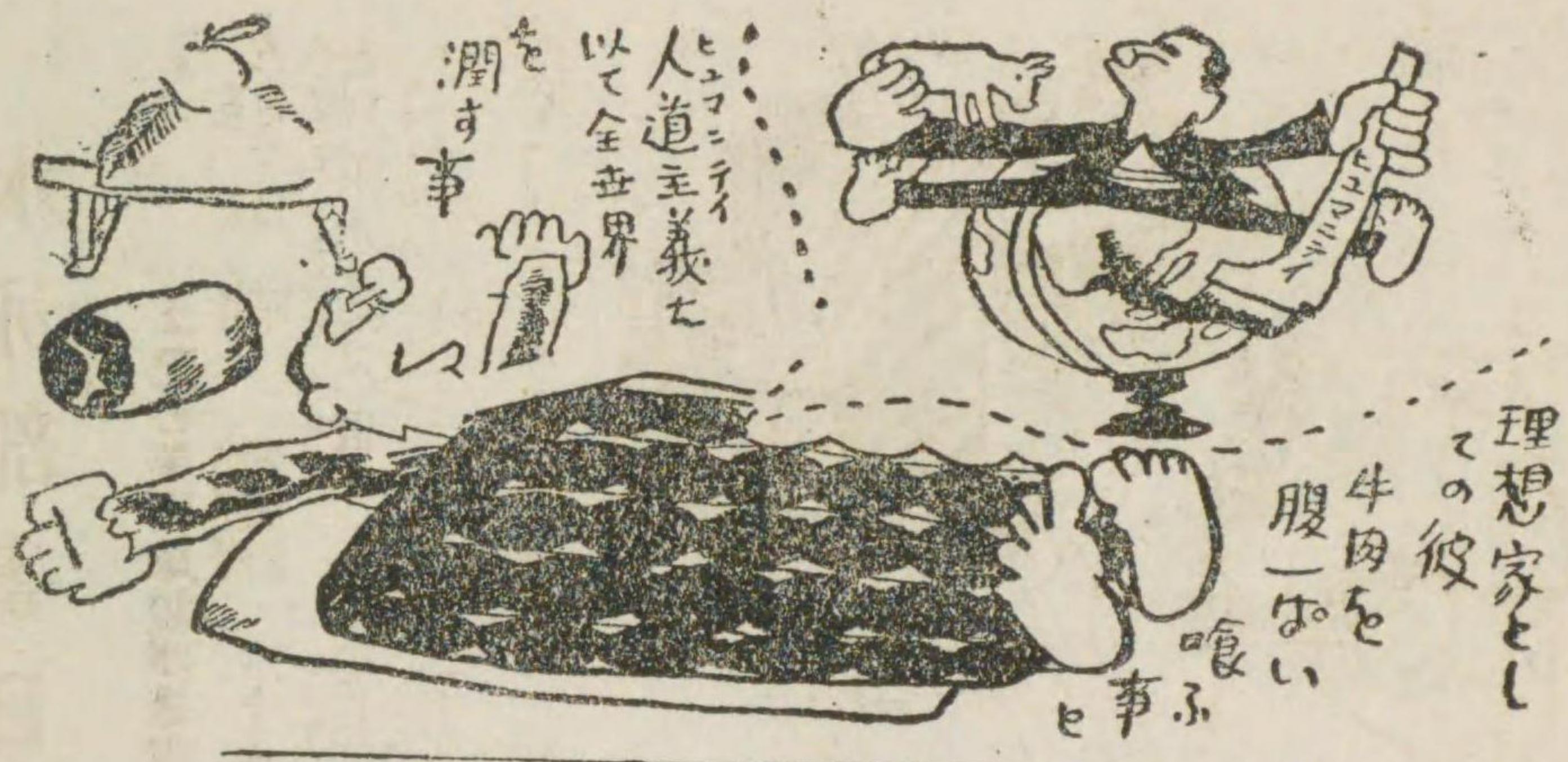
美術家
として
の彼
年賀
状の
はかき
に筆の
口へ
自刻して
押す
仕立
の
彼の
針へ
糸を
通す
心苦大



法律家
として
彼の
下宿
料未拂
の友人と下
宿の番頭
との中
入つて
若し出来ん
場合は僕が
腹を切ると言ふ
番頭「あな
たに腹を切
て頂いては
様かありま
せん



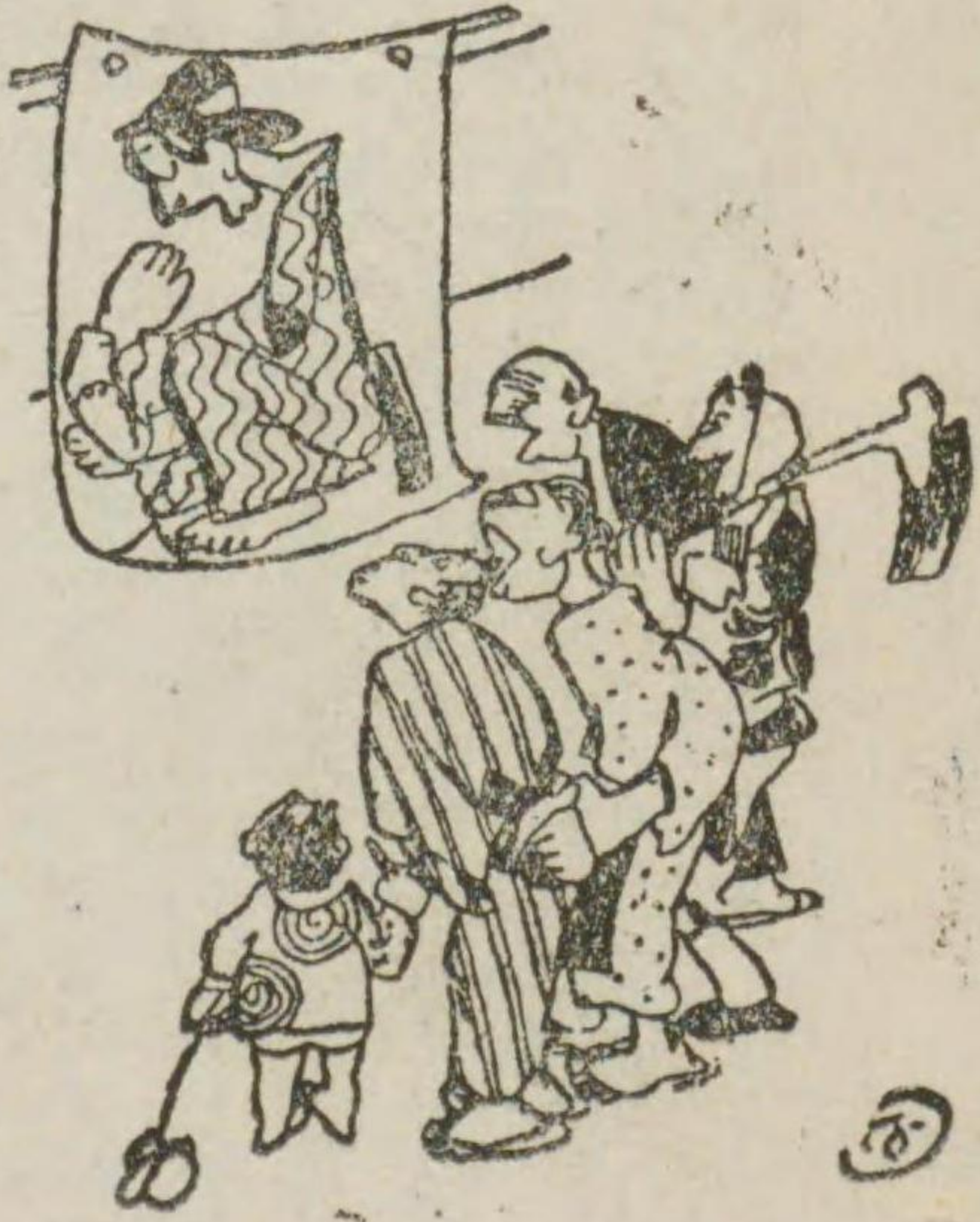
思想家
として
彼の
多
哲
も結果
は實行
如何に存す
と云ふ結論
から護破し
た書を焼
いて尻を
あてめ
る
醫學
者
としての
彼



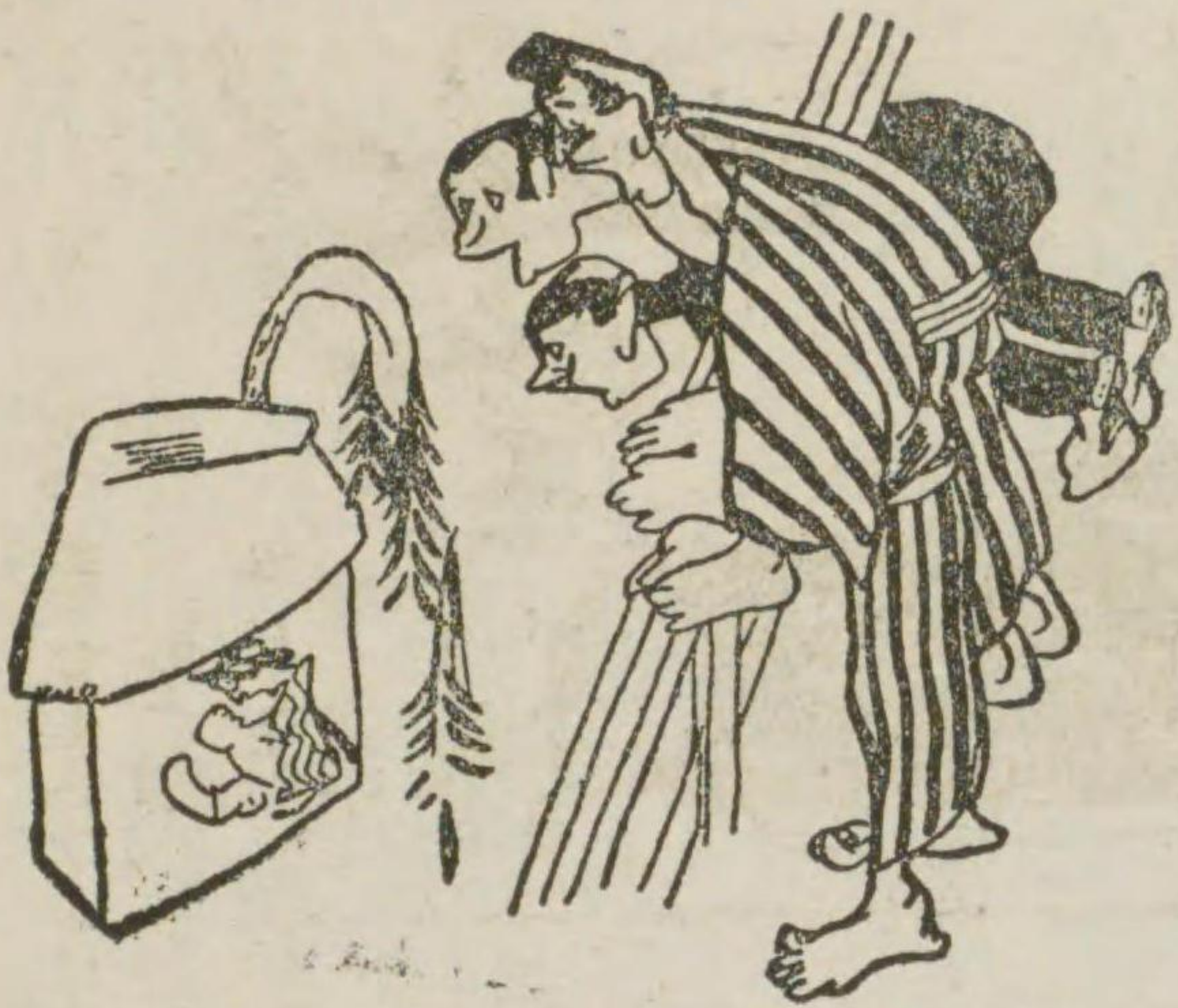
水泳部 畫日記

土肥の美術學校水泳部 その一

八月三日 晴 寒暖計 八十七度
 吉村屋(水泳部の置いてある宿屋の名)の前の荒物屋のかみさんは一寸ちんけいとうだ(註曰美人の事水泳部の用語)ゆうべ洋燈をつけずにみんなで宿屋の二階で涼んで居ると前の家のかみさん竹の皮包を取出して切りに中を吟味して居る所が丸見えだ。息を殺して見て居ると頓てかみさん包を解いて白糖の塊を一つ矢庭に口へ抛り込んだ。
 よつて今朝その畫を戲畫に描いて宿屋の縁側へ貼り出す。かみさん一日奥へ逃げ込んで顔を見せない。



その二
 八月四日 半曇 八十六度
 彫金科のエフが一晚泊りで長津呂(伊豆下田の手前の漁村)まで遠征に出かけた。
 何でも七十錢で豪飲したと威張つてやがる。歸り早々ふてくしくも



水泳部 畫日記

晝寝だ。こんな奴は葬式にしちまふに限ると額へシの字を貼りつけ長津呂七貫居士といふ戒名を作つて線香を上げて死人扱ひにしてやる。知らないで野郎をかいてやる。そのうち坊主に成り済してお経を上げてた洋畫科のテイと日本畫科のエスとがお経の上げ工合が上手いとか下手いとかで喧嘩を始め出し騒がしいので七貫居士遂に眼を覺す。驚いて額にシの字を付けた儘七貫居士テイとエスの間へ割つて入り「喧嘩はよせ」と切り止めて居る。

その三

八月三日 曇 寒暖計 八十一度



エフと泳ぎに行く。エフが腹が痛いと言ひ出した。天気だと熱い砂へ少しの間腹を押しつけてると癒るのだが曇つてから仕方無い裸體の儘村の醫者へ寄つて診て貰ふ。醫者さまも裸體で代診と碁を打つた。裸體の儘で診て呉れる。娘だらう非常なちんけいとうが居て襖の陰から覗いた。エフの奴極り悪るがって容體のことは言はず、泳ぎの歸りだもんですからムニヤくと裸の言譯ばかりしてる。戻つて連中にもちんけいとうの話をしてやると、いやはや薬を取りに俺れも行くわれも行く云ふ奴、都合六人連れて出かけやがった。

その四



八月三日 晴 寒暖計 九十一度

朝の汽船で洋畫科のアイが歸るさうだ。見送るのだと夙早起される。例によつてへなちよこボートを漕ぎ出しアイが汽船に乗込み出發の汽笛が鳴るを相圖にボートを引つくり覆す。これが送別の禮式ださうな。誰か始めたか知らぬがつまらねえ事が禮式になつたものだ。朝早いので寒くて嫌だが外の奴にしてやつてアイに許してやらぬとアイの事だ、僻み根性でも起すといけぬ。不性無性に引つくり覆してやる。アイが悦んで萬歳々々と叫んだ。部長の和田英作先生が二三日のうちに來ると云ふので昨日あたりから洋畫科の連中は急に繪の具箱を擔ぎ出した。何でも畫布を白くさへ



水泳部畫日記

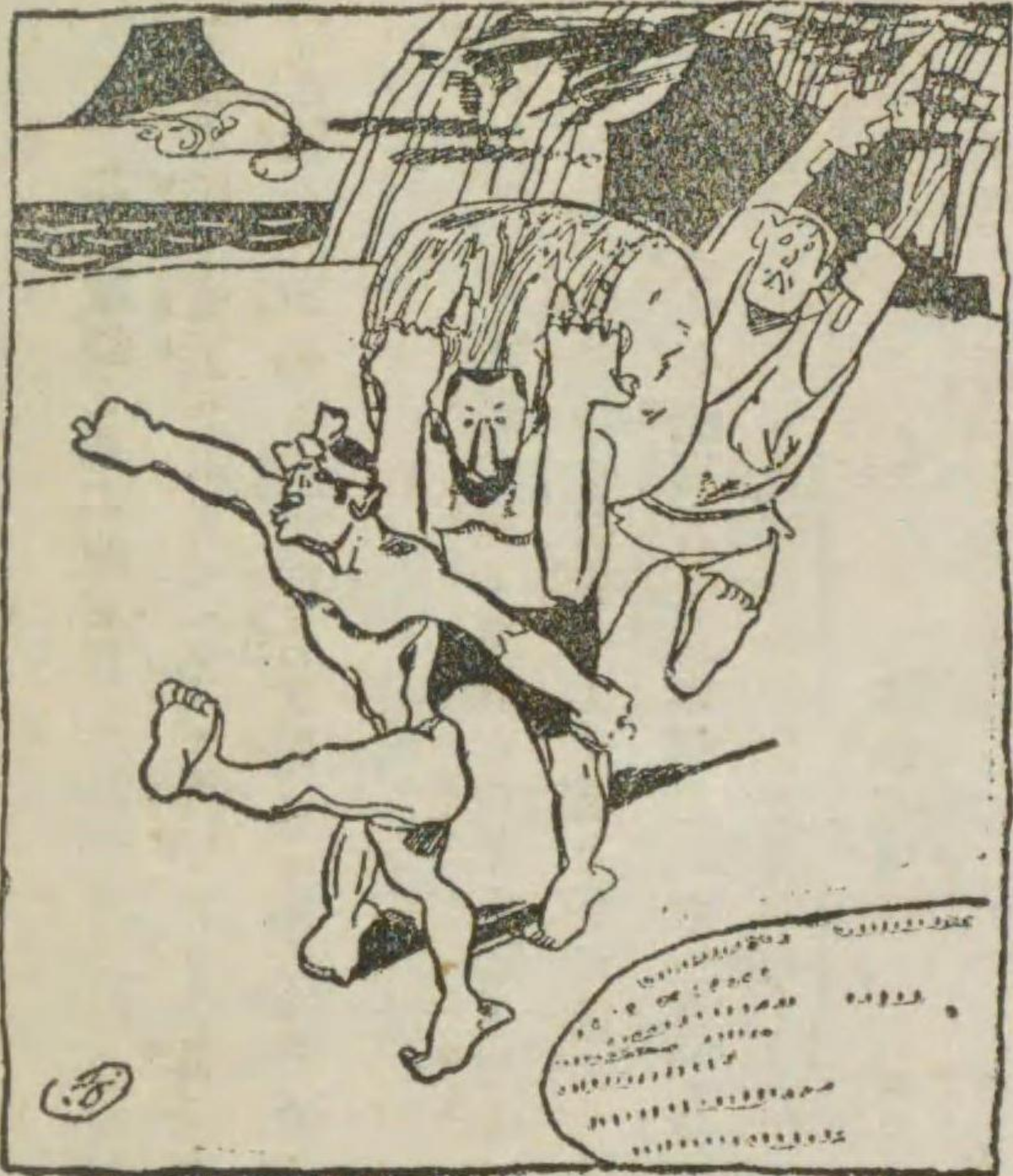
しとかなきあいゝんだといふ目論見で金魚の糞見たいに珠數つなになつて描きに出掛けて行く。場所を窮してつまらねえ百姓家を右から描いたり左から描いたりしてゐる。



水泳部スケッチ (戸田の大學水泳部)

一、ストーム

伊豆の戸田に帝大の水泳部がある。戸田灣の灣口に横はる長洲の御濱一帶を占領して松林の中に宿舍やら食堂やら酒保やら浴場やら學士博士の泊る學士部屋やら設備至れり盡せりである。この名物の隨一にストームがある。夕陽遠州灘に落ちて富士の影が暗紫色に



空に浮上る頃より酒保に集つた猛者連追々興が昂つて來て月達磨山に上るに及び遂に勃發する。御濱の端の辨天の社から大太鼓を無斷借用に及び定連工學博士の息子の辰野君醫學博士の息子さんの緒方君工學博士の息子さんの原君などが先頭で場中を練り歩く、寢て居る奴は一々蚊帳を剝いで寢相の好い悪いを檢閲して廻る。先頃この一行學士部屋に襲來して丹波敬三博士を踏みつけ博士に足を掴まれ翌朝まで人質に取られた



二 軍鶏と馬の蹴合

學士部屋で晝寢をしてると早く來い〜と起された何だと聞くと軍鶏と馬の蹴合を觀せてやるのだと云ふ。

駈け付けると委員の室で軍鶏と仇名のつく法科のエツチ君と馬と名のつく農科のテイ君と暇に飽きてそろく〜いがみ合ひを始めてる。軍鶏君『おい馬ア一蹄が延びた様ぢやないか削つてやらう』馬君『今日は鶏冠の色が馬鹿に悪いぞ沼津へ行つて鰻でも喰つて來い』軍鶏君『御濱には雌が居ないからとつてちつたあ鬘の手入れをしるよ、頸まで延びたぞツ』と馬君のモミアゲを撫でる。馬君『よせよ、よせよ、よせよば薄氣味の悪い。これでも結構だといふ奴がちやんと居るんだよ。氣の毒だがコウ見えても俺はこれで婚約済の身體だよ』軍鶏君『ハ、ア種馬に買はれたな』馬君『エ、イこの野郎、愚圖々々云ふと締めちまふぞ』とこゝで兩者蹴合ひが始まる。頓て蹴合ひにも飽きたと見え軍鶏君と馬君と連れ立つてモーターボートで戸田の村の汁粉を喰

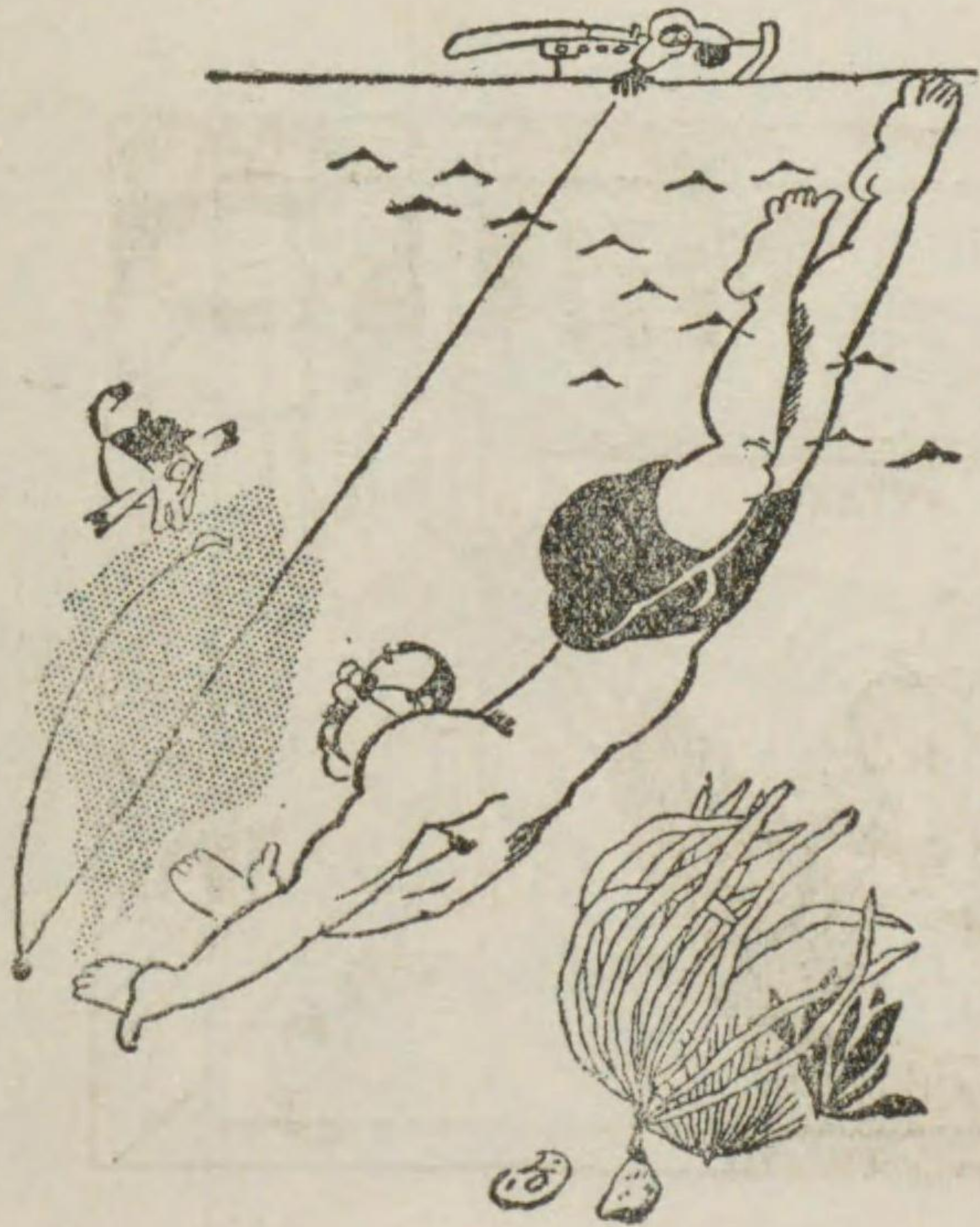
水泳部スケッチ

ひに出かけた。一伍一什を分別らしい顔をして覗いて居た學士部屋の鬘の連中も荷足船に乗込んで汁粉を喰ひに行く後は静か。油蟬の聲が急に耳につく。(圖中向つて右が馬君左が軍鶏君)



三 大學流の黒鯛釣り

戸田の連中がつれづれに黒鯛を釣る、その釣り方が又學者揃ひだけあつて甚だ研究的だ。黒鯛の習性として水底の水が濁る所へ好んで集つて來るといふ智識を應用して一人が舟上で釣綸を垂れると一人が水底まで海老を装つた釣針を運んで行く。そして釣針を置いた水底の砂の附近を掻き廻して上つて來る。若し近所に黒鯛が居れば必ず釣れる事恰も囊中の物を探るが如きものだ、理科のワイ君が鼻蠢かした水泳部開設以來十有餘年間専門の學生連が暇に飽かして考へ付いたのだ。いくら黒鯛でも遣り切れまいテ。



四 名物男藤さん

水泳部に藤さんといふ實直な老爺が居る。水泳部閉鎖中は御濱に一人立籠つて留守居役を勤めるし開設中は勿論船の始末、魚釣りの餌の世話、禪の周旋、菓子屋への使、何呉れとなくまめしく取賄うて調法なので學生連大の最眞の役者だ平家蟹の背中見たいな面をしてる癖に味噌ツ歯をニユツと出して笑ふ所、中々の愛嬌ものだ。

藤さん大の吃である。牛乳が云へなくてチ、チ、チンチ、と云ふ其處を付け込んで例の悪戯連毎朝々々同盟して『藤さん牛乳は未だかい』と急ぎ立て強請み立てる。藤さん眼を白黒させ乍らあつちへも『チ、チ、チンチは未だ來ねえよ』こつちへも『チ、チ、チンチは未だ來ねえよ』と云譯して歩いてる。

□投書 お描きの大學流の黒鯛釣とは私共の地方日向延岡地方ではちん釣りと申し私共の父も祖父も又其祖父もやつて來て居る方法であれば多分同地方の書生さんが戸田水泳部に輸入して始めた釣方ではありませ

水泳部スケッチ



んか(小石川渡木生) 戸田の黒鯛曰く『ならば愈以て遣り切れぬテ』

五 病人軍の來襲

大學水泳部が堂々たる御濱一帯を占領し尙且其租借期限満期後も續いて五十箇年とか租借契約を戸田村と締結し得る先約權を得て居るのには常に暗黙の裏に色々戸田村に對し互惠的の恩澤を施して居るからである。戸田の村民達は夏期水泳部に大學の名醫が遊びに来るのを見はからひ、一年分溜め込んだ病人を携へ船を横ひ灣を渡つて診て貰ひに来る。女房を背負つた屈強の漁夫、乳呑子を抱へた農婦、杖に縋つた老婆等は一々素直に先生の言ふ事を聞いて歸つて行く、絶望を告げられた病人でさへ大學の先生に診て貰つた上の事だからと悲歎の中にもあきらめを付けて絶對に運命に服従する健氣な足取りを以て靜かに船に戻る。黄昏である、灣上には水淺黄色の暮靄が漂ふ。病人の船に點せられた燈火が次第々々に夕闇の奥に消えて行くのを見て、岸に立つ流石の腕白連も腕拱いた。涙と鼻汁を一しよに啜り込んで『俺れは感冒をひいた様だ』と胡摩化して居る奴が居る。

六 おらア日本人だ

幕末史の一節に嘉永六年露亞西の使節フーチャチンが來朝した。長崎を経て浦賀に廻航の途中圖らずも伊豆の海で大海嘯に出遭ひ搭乗の軍艦も何もかもみな碎けて仕舞つた。

よつて代りの船としてスクーネル型の船一艘を建造し與へ交渉談判一段落の後無事露本國へ歸還せしめたといふ話がある。そのスクーネル型の船を本邦で初めて建造した露人が戸田の村娘と用捨なく日露同盟を實行し緒髮碧眼の子孫が今戸田村の一部に傳はつてゐるといふ事である。

例の暇に飽きた腕白連が早速探検と出掛ける。村外れへ來ると一人のかみさん山の清水を盥に受て餘念なく洗濯し居る。肥滿の相格といひ上ずつた目指といひ確に毛唐臭い、一同立止まつて『どうも怪しいぜ』怪しいとも鼻から眼の邊が確に露助の型だよ、バルチツク海邊の露助の型にチャンとあゝいふのがあるよ『皮膚は妙に毛深いぢやないか』とひそ／＼評定中をかの

水泳部スケッチ

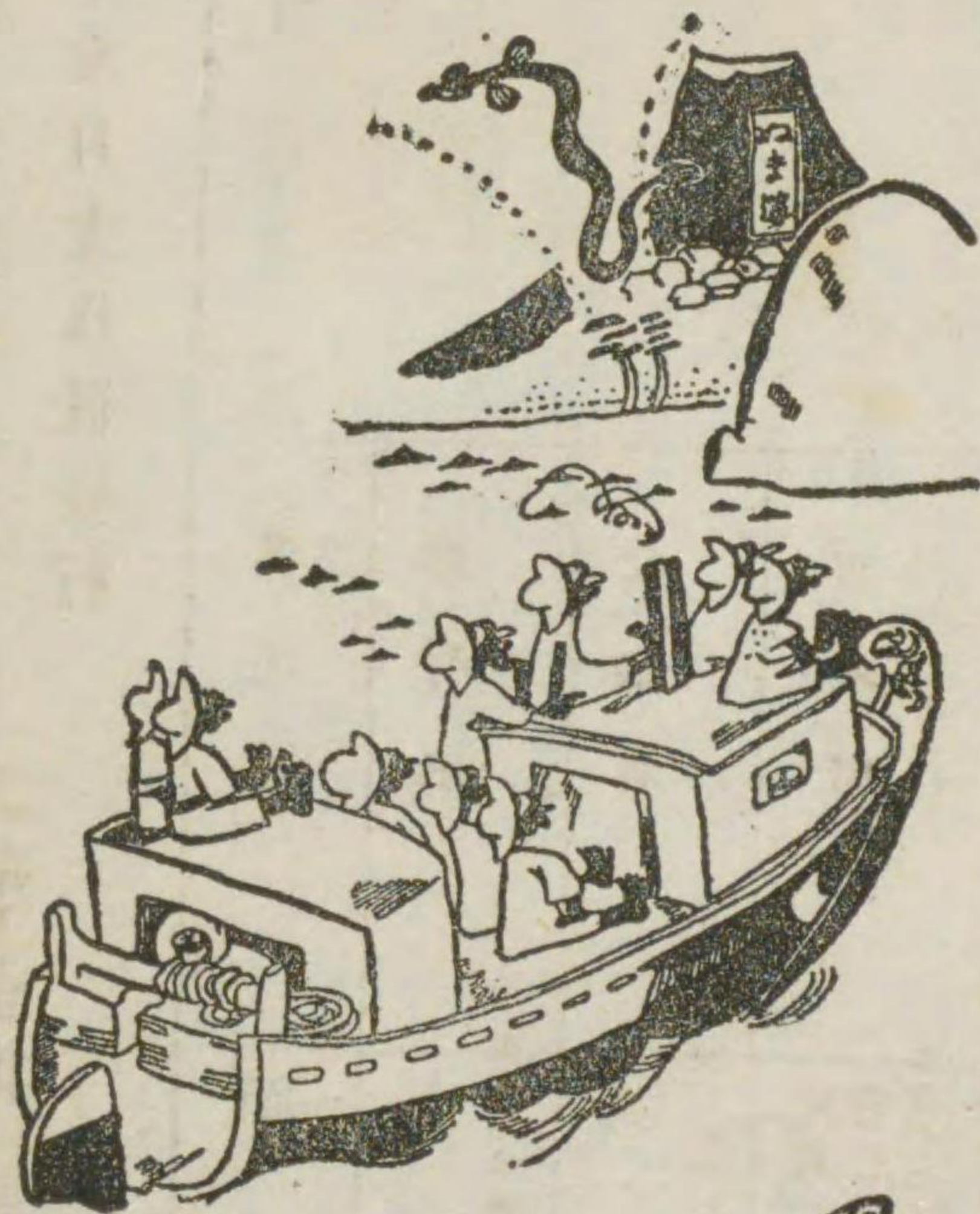


かみさん何時聞き込んだものか突然血相變へ『この痴呆野郎！おらアチャンと日本人だア』と嗚怒つた。



七 鰻喰ひに遠征

一日の賄料四十錢で例へば食堂一日の献立を観ると朝、味噌汁に福神漬、晝、車海老の天ぷら、晩、コロッケ一皿といふ書生諸君にしては分相應の御馳走ではあるが腕白連の胃の腑は恐らく別眺へと見える。毎日々々美味いものは無いかくといふ聲が御濱一帶に聞える。よく聞いて居ると其聲が取締部屋の方へ凝集して来て今度は鰻が喰ひたいくと



いふ聲と具象化して来る。これが一週日程續いたと思ふと愈堪切れ無くなつたか遂にほんとに鰻を喰ひ行く處の沼津遠征軍が編成せられた。並べて見ると如何

入る時一同心臓をドキドキさせハアと溜息を吐いた

にも鰻を喰ひた相な食欲の權化らしい面つきが三ダース半以上もある、到底脆弱なモーターボートや快走船で輸送しきれぬものではない。漁船の石油發動機船を借り上げて出發は明早曉と定まる。

おちく寝られぬ儘に日の出ぬ前から起き出してモウ仕度である。鬚を剃つてる奴がある。鰻を喰ひに行くに鬚を剃る事もあるまいと冷笑する先生がタカデアスターゼやら消化劑ヂゲスチンを用意してゐる。あくまで鰻と情死か乃至果し合ひをする覺悟と見える。解纜。船が江田沖にさしかり雲の晴間より沼津の葦が見え出すと甲板の連中涎をダラ／＼垂らした。して船が、沼津の川へ

昭和五年十月十四日印刷
昭和五年十月十八日發行

「スポーツと探訪」定價金壹圓五拾錢

著者 岡本一平

發行者 上村清敏

印刷者 杉山愛二

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



發行所

東京市本郷區駒込上富士前町百九番地

會社 先進社
電話小石川二四四番 振替東京六五三三八番

先進社發行圖書目錄

青野季吉著	經濟學博士 太田正孝著	經濟學博士 太田正孝著	高橋龜吉著	稻村隆一著	椎名龍徳著	海老名彈生著	青木誠四郎著	文學博士 松本亦太郎著	文學博士 小西重直著
サラリーマン恐怖時代	新聞ざんげ	資本主義の修正 <small>アメリカの繁榮とドイツの復興</small>	日本農村經濟の研究	農村は何處へ行く	病める社會	基督教大觀	學業成績の研究	兩親のための一般心理學	母のための教育講話
十四版	九版	十五版	十六版	十六版	二十版	六版	六版	六版	七版
送料 定價 一・三〇 二二	送料 定價 一・八〇 二二	送料 定價 一・二〇 二二	送料 定價 一・五〇 二二	送料 定價 一・三〇 二二	送料 定價 一・八〇 二二	送料 定價 一・五〇 一四	送料 定價 一・八〇 一四	送料 定價 二・〇〇 二二	送料 定價 一・五〇 二二

先進社發行圖書目錄

齋藤 茂譯 <small>ハインリツヒ・ストレーベル著</small>	荒川 實藏譯 <small>ウエ・サラビヤノフ著</small>	萩原 厚生譯 <small>ポール・ラフアルグ著</small>	荒川 實藏譯 <small>エス・ユ・ウイツテ著</small>	池崎 忠孝著	池崎 忠孝著	室伏 高信著	室伏 高信著	室伏 高信著	室伏 高信著	小野賢一郎著
獨乙革命と其後	史的唯物論入門	正義・善・靈・神の唯物史觀	さればロシヤは敗れたり	米國怖るゝに足らず	日本潜水艦	アメリカ其の經濟と文明	日本はどうなる	新英雄傳	奧村五百子	
五版	六版	六版	十二版	百版	廿五版	三十版	二十版	十五版	十四版	
定價 二・〇〇 送料 一・四〇	定價 一・三〇 送料 一・二〇	定價 一・七〇 送料 一・二〇	定價 一・二〇 送料 一・一〇	定價 一・五〇 送料 一・〇〇	定價 九〇 送料 一・〇〇	定價 一・六〇 送料 一・二〇	定價 一・六〇 送料 一・二〇	定價 一・五〇 送料 一・一〇	定價 二・〇〇 送料 一・四〇	

先進社發行圖書目錄

大藏大臣 井上準之助著	安部 磯雄著	圓地與四松著	壽木 孝哉著	杉 一郎著	林 房雄著	林 房雄著	明石 鐵也著	貴司 山治著	細田 民樹著
金解禁—全日本に叫ぶ	國民の審判に訴ふ	空異のツエツペリン	就職戦術	金儲實話	都會双曲線	鐵窓の花	失業者の歌	同志愛	黄色い窓
百廿版	六十版	十六版	廿六版	卅版	十九版	八版	六版	六版	十二版
定價 一・〇〇 送料 一・〇〇	定價 六〇 送料 八	定價 一・六〇 送料 一・二〇	定價 一・七〇 送料 一・四〇	定價 一・六〇 送料 一・四〇	定價 一・五〇 送料 一・二〇	定價 一・七〇 送料 一・二〇	定價 一・二〇 送料 一・一〇	定價 一・六〇 送料 一・二〇	定價 一・七〇 送料 一・二〇

先進社發行圖書目錄

青木誠四郎著	倉田百三著	エルンスト・エンゲル著 佐藤雅雄譯	パーキン・ヘッド著 佐藤莊一郎譯	アンドレー・マロウ著 新居格譯	エミール・ドワイル著 早坂二郎譯	大佛次郎著	田中貢太郎著	ヴァルガ著 坂井哲三譯	川端康成著	猪俣津南雄著	武政太郎著
子供の生活の見方	絶對的生活	鋼鐵のあらし	二〇三〇年の世界	熱風	一九一四年七月	日蓮	旋風時代(2)	世界の農業と農民問題	淺草紅團	支那問題入門	日本の子供
最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊	最新刊
送料 定價 二・〇〇	送料 定價 二・五〇	送料 定價 一・五〇	送料 定價 一・八〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・五〇	送料 定價 一・五〇

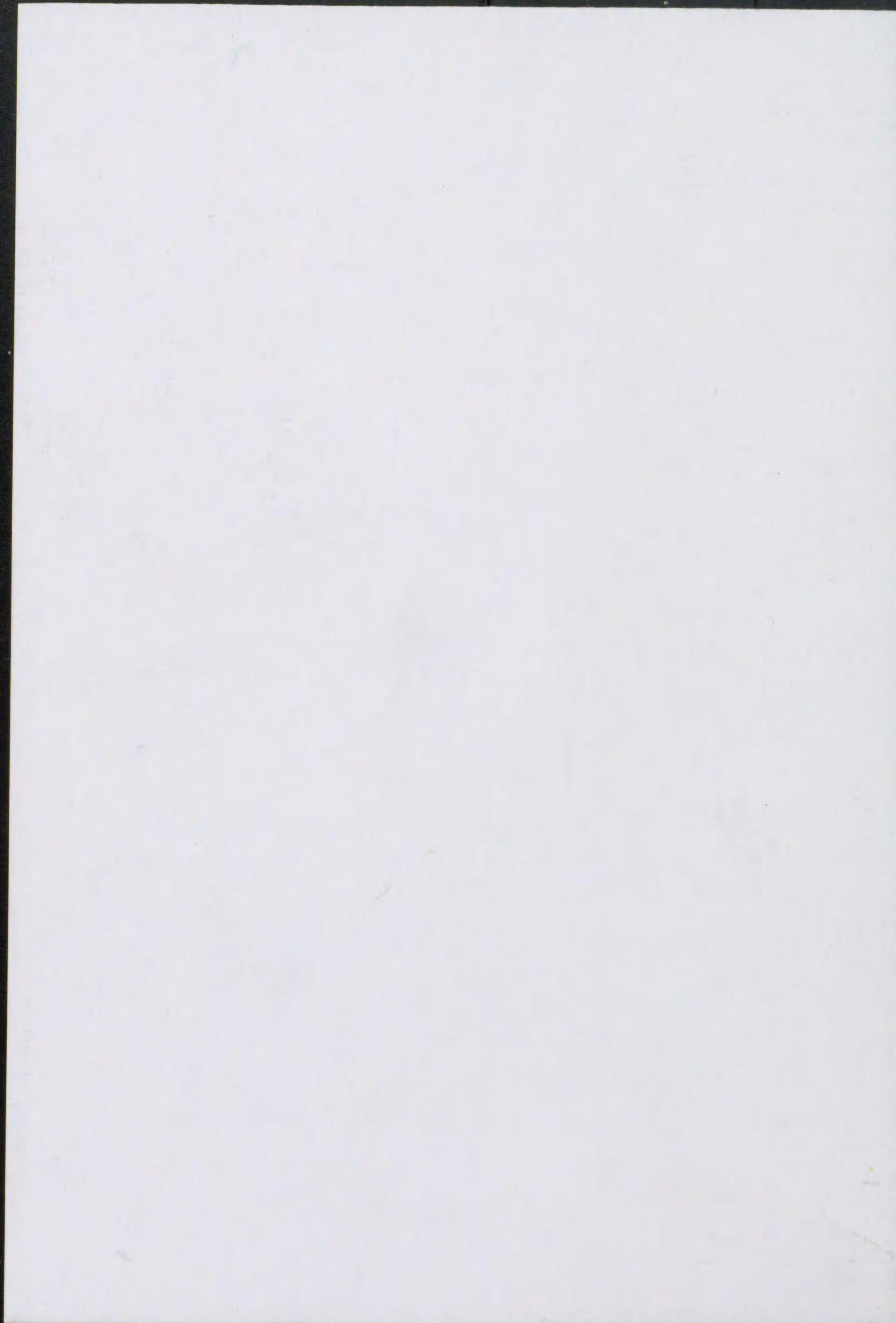
先進社發行圖書目錄

三宅やす子著	大佛次郎著	大佛次郎著	大佛次郎著	吉川英治著	吉川英治著	佐々木味津三著	田中貢太郎著	フロイド・デル著 小野忍譯	今東光著
金(カネ)	角兵衛獅子	山嶽黨奇談 (角兵衛獅子續編)	幽靈船傳奇	貝殼一平(上卷)	貝殼一平(下卷)	風雲天滿草紙	旋風時代	アプトン・シンクレア評傳	奧州流血錄
十版	十六版	十六版	十版	廿六版	廿六版	新刊	廿四版	最新刊	最新刊
送料 定價 一・八〇	送料 定價 一・五〇	送料 定價 一・五〇	送料 定價 一・三〇	送料 定價 一・八〇	送料 定價 一・七〇	送料 定價 一・六〇	送料 定價 二・〇〇	送料 定價 一・五〇	送料 定價 一・八〇

597
357

先 進 社 大 衆 文 庫

三上於菟吉著	土師清二著	直木三十五著	林和著	國枝史郎著	行友李風著	甲賀三郎著	江戸川亂步著	佐々木味津三著	三上於菟吉著	吉川英治著	大佛次郎著
清川八郎(下卷)	旅鳥國定忠治	荒木又右衛門	遊俠男一代	生死巴	獄門首土藏	神木の空洞	偵名探明智小五郎	双影走馬燈	清川八郎(上卷)	女來也	かげらふ嘶
(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
同	同	同	同	同	同	同	送料價 七 八〇	送料價 八 八〇	同	同	送料價 七 八〇

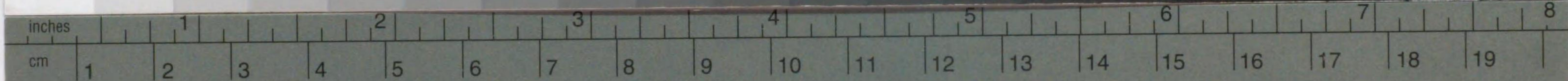


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

